

## 道元禪師の遺跡

東 隆 眞

### 一、誕生地

妙覚山誕生寺  
みょうかくさんたんじょうじ

▲京都府京都市伏見区久我本町

▲京都駅から市電中書島ゆき大手筋で下車し、市バス久我ゆきで終点下車。

桂川の西岸にかかっている久我橋のたもとにある。「曹洞宗祖遺跡」と「誕生山妙覚寺」としての石柱が目じるし。

この寺は、大正年間に、道元禪師（以下、禪師の称号を略す）の誕生地を顕彰して建てられた。

この一帯は、むかし久我の庄とよばれていた。村上源氏の流れをくむ「久我太政大臣雅実」が、その父顕房の別邸久我水閣をゆずられて久我庄となし、ここを領して、久我家の祖となったことにはじまるという。以来、久我家は、明治初年に東京へ移転するまで、ここを住居としていた。ちかくには、久我神社、久我家歴代の墓所跡、菱妻神社などがある。なお、久我本町にある日蓮宗の妙真寺境内には、道元の母の墓で、美術的にも価値のたかい「鶴の塔」が安置されていたが、ただいまは行方不明である（『文化時報』昭和三十二年六月九日付）という。

道元の実父にあてられる久我中院正統・土御門内大臣・久我通親の殿跡は、土御門高倉方四町と河崎北泉とに在った（観応元年八月十三日・久我長通讓状）が、その別邸が、ここ久我庄に在ったという。その点から推して、道元は、あるいは、この地で誕生し、通親の没する三歳の前後まで、養育されたのではなからうかとおもわれるのである。だから、道元がこの地で生れたという確証は、なにもないわけである。木幡山とは、東西の直線で、七、八キロの距離にある。

大正五年（一九一六）八月、ときの本山永平寺第六十六世日置黙仙禪師は、久我家当主・久我通久氏から、この地が道元ゆかりの久我家屋敷跡であることをきき、その顕彰を發願、かさねて史実を調査し、宗門寺院に協力をよびかけた。用地の五千坪（一万六千平方メートル）は、神戸市・田村市郎氏の特志をえ、なお福井県南条郡王子保村字小松の永平寺直末寺院・妙覚寺の寺籍を移転し、誕生山妙覚寺と号し、大正七年（一九一八）一月、地鎮祭を挙行了した。昭和十六年（一九四一）、宗教団体法にもとづく寺院規則届出の際、妙覚山誕生寺と改称し、現在にいたる。檀家はなく、住職は永平寺の役寮がつとめることになっている。

この寺の本堂には、道元の木像が、本尊として安置されてある。これは、道元自作と伝えられ、福井県の妙覚寺から移されたもの。また、境内のコンクリート造りの誕生寺図書館（永平寺図書館ともよぶ）は、浅野セメントの浅野総一郎氏の寄進によるという（笹岡自照老師著『道元禅師御旧蹟めぐり』）。

※栗山泰音禅師の『総持寺史』には、小松の妙覚寺について、次の通り、述べてある。参考までに、掲げておく。

「永祖は寛元元年七月十六日の極暑に深草なる興聖寺の焼跡を御発錫あつてその月末には越の禅師峯に入られたやうであるから、この間凡そ半箇月の行程であるが、予は永祖がこの途次の幾日かを越前の在方なる小松の妙覚寺に錫を留められたであらうと考へる（尤もこの年間七月一日には早くも禅師峯領に於ける「三界唯心」の示衆があるから、その以前に入山せられたものと見る）それは何故かといふに妙覚寺は祖師が永平寺より先きに開かれた寺ではあり、且禅師峯にて御着の用意の整る間をしばしこの寺で過されたものであらう、

建徳記の補註に、面山和尚が妙覚寺はもとより真言宗の伽藍であつて波着寺の懷鑑徹通等の請に依つて書せられたであらうといつて天福元年四月に永祖の真筆であるといふ妙覚寺勧請の文六十九字を掲げてはゐるが、その頃永祖が妙覚寺へお越しになられるはずもないから、永平寺より先きに開かれたとすれば、この入越の途次より外にないわけである、また面山和尚はその本文に「マタ祖像トテ一木像アレドモ、コレハ真言八祖ノ一箇ト見ユルナリ」といつてゐるが、これには少しく疑問がある。」

〔補註〕永祖尊像に就ての一説 予は少壮の頃から越前の妙覚寺には永祖御自作の尊像のあることを耳にしてゐたが、今から三十五年前、すなはち明治三十五年（八月二十七日）の二六新報に左の記事のあるのを読んだことがある。

越前南条郡王子保村字小松妙覚寺は高祖大師越前行化の際永平寺より先に

開かれたる道場にして同寺に目下自作等身の木像を安ず、寺門は荒れ果て住職ともなく廢寺同様なり、地理は武生市今庄の間西手に当る、肖像は矮小なれども殊の外美男である」云云

この記事は予が耳にせると同様であるが、面山和尚が祖像といつても真言八祖像の一であらうとはどうしたものか、古来同寺では真言の祖像を永祖御自作の尊像なりとして安置してゐたとすれば、祖像と真言の像とはその相好は兎も角、第一法衣の様式が違ふはずである、尤も小松の妙覚寺から現に洛南誕生山に移したる尊像が偏袒右肩でないところに些か疑問がないでもない。

- (1) この妙覚寺は今の洛南誕生山妙覚寺の前身である。  
(2) 一説にはこの永祖の尊像は後に大乘寺から永平寺へ納めた尊像と一木同体ともいはれてゐる。」

## 二、幼少時代を過ごしたところ

### 木幡の山荘

▲京都府宇治市東宇治町字木幡

▲京都駅から国鉄奈良線・京阪宇治線で、木幡下車。徒歩およそ十五分。高台に、「袈裟山荘」の標柱がある。土地のひとは、木幡を「こわた」松殿山荘を「しやうでんさんそう」と呼びならわしている。

木幡の山荘のあったところは、藤原基房の別荘（『明月記』跡であり、松殿は基房の号である（『尊卑分脈』）。基房は、寛喜二年（一一三〇）十

二月二十八日、この「木幡別荘」で没した。八十六歳であった（『百鍊抄』）。かつては摂政・内大臣となつた基房の子「松殿禪定閣」（『伝光録』）すなわち師家は、道元を「猶子」にむかえ、朝廷の要臣にしようと予定していた。一般に、基房の第三女・伊子が、道元の生母といわれている

（大久保道舟博士著『道元禅師伝の研究』）。この通説にしたがえば、基房は、道元にとって、母方の祖父にあたる。けれども、実は、これもはっきりしたことではない。

ところで、『伝光録』は、「ヒソカニ木幡山ノ荘ヲ出テ叡山ノ麓ニ尋不到ル」としるし、天正本『建掇記』は、「十三歳ノ春、夜中ニ忍出テ、木幡ノ山庄ニ至リ、其ヨリ尋テ叡山ノ麓ニ至リ」とかいている。『伝光録』にしたがえば、道元は木幡山荘から叡山の麓へ赴いた意味となり、木幡山荘は道元の誕生地でもあり十三歳前後までの日月をおくったところと解したくなるであろう。天正本『建掇記』によれば、道元は生家を出て木幡山荘に立ち寄り、さらにそののち叡山麓下へのぼったというように読め、木幡山荘で日常生活をすごしたとほうけとりにくいであろう。それはそれとして、おおくの学者は、この木幡の山荘を道元の誕生地と推量しているが（たとえば大久保道舟博士・守屋茂博士『道元の誕生地考』日本印度学仏教学研究第二十一巻第一号）、笹岡自照老師や今枝愛真博士は、この推量に懐疑的である（笹岡氏前掲書、今枝氏『道元とその弟子』）。私も、どちらかといえば、笹岡、今枝両氏の立場を採るのである。それは、およそいかなる史料にも、木幡の山荘で道元が生れたとは、書いてないからである。けれども、木幡の山荘が、幼少時代の道元にとって、深いつながりをもっていることだけは、さきの『伝光録』や『建掇記』によって明らかであろう。そこで、私は、この地を、誕生地としないで、幼少時代を過ごしたところと仮定しておく。なお、ついでに言っておくと、道元は正治二年（一二〇〇）京都で生れたことは、諸伝が一致してお

り、問題はないが、誕生の月日については、面山瑞方（一六八三—一七六九）の『訂補建掇記』が正月二日とするのに始まるようである。いまは陽暦に換算されて一月二十六日とされている。

いまの財団法人松殿山荘は、昭和十年（一九三五）ころ、大阪の高谷宗範氏が、日本の茶道礼法を大成する意図のもとに、数百万金を投じて建てたという。玄関に衽殿山荘桂堂書の横額がかかっている。

裏手には、冬嗣、基経、時平など藤原一門の墓や、皇室の中宮・皇妃などのいわゆる宇治陵もある。もと、京都の南すなわち伏見から深草のあたりは、冬嗣のあと藤門一族の所領であり、木幡山はその別墅地であった。

### 三、発心の寺

たかを  
雄を  
寺に  
たかを  
雄を  
寺に

▲京都府京都市右京区梅ヶ畑高雄町

▲京都駅から京都バス高雄ゆきで高雄下車。西へ徒歩およそ二十分。

道元は、承元元年（一二〇七）八歳のとき、母の死にあって、生滅の無常を感じ、出家のころざしをおこしたことは、あまねく知られている。しかし、それでは、出家を発心したのはどこであったのか。このことを明記する史料はどこにも残っていない。わずかに、『伝光録』が、「高雄寺」としているだけである。次のとおり。

八歳時悲母ノ喪ニ値テ哀歎尤深即高雄寺ニシテ香烟ノ上ルヲ見生滅ノ無常ヲ悟ル夫ヨリ発心ヲ心サス

もっとも、右の文は、高雄寺でとりおこなわれた母の葬儀ないし仏事

に参列し、たちどころに発心したのか、それとも高雄寺で無常をさと  
り、そのしばらくのち、別の場所で発心したのか、あいまいな表現では  
あるが、いずれにせよ、高雄寺が、幼ない道元の宗教的生涯の方向づけ  
に、決定的な影響を与えたところであることは間違いないであろう。す  
くなくとも、『伝光録』によるかぎり、そのように考えざるをえない。

さて、高雄寺とは、清滝峯高雄山寺（大山公淳氏著『密教史概説と教理』  
を指すのであろうか。もし、そうであるならば、高雄寺は、いわゆる高  
雄神護寺のことである。高雄は高尾とも書き、清滝の溪谷にある梅尾、  
槇尾とともに三尾といい、ふるくから紅葉の名所として知られている。

神護寺は、和氣清麻呂が創めた河内の神願寺を、その子真綱が天長元  
年（八二四）、この地に移し、神護国祚真言寺と号した。したがって、和  
氣清麻呂が開基となっている。

延暦二十一年（八〇二）の正月、真綱は、最澄を迎えて天台の仏法を  
請ぜしめ、さらに弘仁元年（八一〇）、唐から帰った空海は、最澄、真綱  
らに金剛界灌頂をさづけ、最澄、秦範らに胎藏界灌頂を授けたともい  
う。

空海が高野山に入ったあと、その高弟真済があとをついだが、正暦五  
年（九九四）、久安五年（一一四九）の火災、応仁の乱などで荒廃した  
が、鎌倉時代、寿永元年（一一八二）には文覚が再興にはげみ、くだっ  
て秀吉、家康らの寄進も加わり、大いに盛えた。いまは、古義真言宗の  
別格本山である。

国宝・重要文化財の建造物、仏具、仏像、仏画が多く、山水屏風、源頼

朝、平重盛、文覚上人らの画像、三絶の鐘、五大虚空蔵菩薩坐像など  
は、とくに広く知られている。和氣清麻呂公廟もある。境内は、幽邃閑  
寂で、絢爛豪華な諸堂は、密教の神秘性を一層ふかめている。もちろ  
ん、道元のゆかりを示すものは、いま、なにひとつ残っていない。

#### 四、剃髪跡

##### 般若谷の千光房

▲滋賀県大津市坂本町（比叡山横川）

▲(1)奥比叡ドライブウェイを利用して横川の中堂へゆき、駐車場から徒歩で  
十分くらい。

(2)京都駅より京福電鉄叡山線の出町柳駅から八瀬ゆきで終点下車。八瀬遊  
園からケーブルカーで終点の四明ヶ岳下車。横川の元三大師堂を目標に、二  
時間三十分ばかり徒歩。その途中の道標にしたがってゆくと、元三大師堂の  
前方下部に、「承陽大師得度靈蹟」の碑がある。

最初の道標には、高さ一米二十糎、幅三十四糎ほどの御影石に「左曹洞宗道

元（禪師得度旧蹟）（昭和三十年五月、京都府宝泉寺住職笛岡自照老師、換骨堂主

久我寛宗老尼らの尽力で、坂野信治郎、長野幸助の両氏が喜捨した」と彫り

こんである。「鎮護国家」の自然石の碑のつぎに、「左・曹洞宗宗祖道元禪師

得度旧蹟」（前記四者の建立）があり、また「左、元三大師堂」の道しるべが

ある。さらに、元三大師堂の門を背にして前方を望むと、右方に高さ一米二

十糎あまり周囲六十糎ばかりの円柱形の石標があつて「承陽大師御靈蹟 従

是下一丁」としるされ、裏側に「明治四十三年七月十日」ときざみこんであ

る。この指標の右横を五十米ばかりさがると、約三百坪（九百九十平方米）

の平地にいたる。ちかくに日蓮の遺跡もある。

道元、建暦二年（一一二二）十三歳の春、比叡山麓に住む良顕（面山  
瑞方は良観にあらためている『訂補建誓記』）法眼を訪ねて、出家のこころ

ざしをうったえた。良顕は「外舅」(『建誓記』)すなわち母方の叔父にあたり、のち建保四年(一二二六)には、園城寺の長吏に補せられたと伝えられる。良顕は、その決意のほどを認めて、道元を「横川之首楞嚴院般若谷ノ千光坊」(『建誓記』)へおくった。

千光坊は、比叡山横川の六谷(兜率谷、香芳谷、飯室谷、戒心谷、解脱谷、般若谷)の随一とされる般若谷の一房である。しかし、般若谷の千光坊は現存しておらず、その旧趾も、いまとなっては確めるすべがないが、出家落飾まえの道元は、しばらくのあいだ、この坊に身を寄せて、その準備につとめていたものと考えられる。

あけて十四歳の四月九日、天台座主第七世公円について剃髪して天台僧となり、同月十日、延暦寺戒壇院で公円を和上として菩薩戒をうけて比丘となる。これより、天台の宗風、南天の秘教、大小の義理、顕密の奥義を学習し、十八歳までに一切経を看閲すること二遍と伝えられる(『元祖孤雲徹通三大尊行状記』)。これが、道元の叡山における修学のすべてとして、史料に残るところである。

さて、道元の出家生活の第一歩は、公円にしたがって剃髪するところから開始されるわけである。公円は、青蓮院慈円から伝法灌頂をうけ、竹林房静厳について顕教を学んで、浄行持律の高僧として聞えていたが、このとし秋十一月には、座主を辞任して、東山の妙法院に退いた様子であるから、道元が師事したのは、およそ六か月ばかりにすぎなかった。けれども、公円のふたりの師のうち、まず寂場房実円は、藤原公教の子で、その姉妹とともに松殿基房を簪とし、また公円のおじにあた

り、つぎに青蓮院慈円は、基房の弟である(中世古祥道氏稿『道元禅師伝ノート』)から、道元が公円を受業師としたのは、あるいは血族のひとり良顕の指示によるところが大きいとみられよう。

ところで、笛岡自照氏は、公円の住房が寂場房であることを、叡山文庫の山田恵諦大僧正(滋賀院門跡)によって確認した。

この寂場房は、横川解脱谷に位置し、横川首楞嚴院(横川中堂。嘉祥元年(八四八)慈覚大師円仁の開創)の本房として、法蘭第一の長老が居住していたらしい。

現在、横川の解脱谷に「承陽大師得度靈蹟」碑が建てられているが、この地域は、『山門堂舎由緒記』、『山門三塔堂舎並旧蹟記』などによると、天台座主第十八代良源大僧正(元三大師)の本坊としての寂場房が在ったところで、明治初年ごろまで、寛文七年(一六六七)建立の寂場堂が残っていた。この堂は、元三大師の秘密供大法を修するための道場であったが、その建物は兜率谷に移されて、恵心院の本堂となっていたが、昭和四十一年五月に焼失し、いまは堂前にあった「寂場堂」の三字をきざんだ石灯籠一基が残っている(笛岡自照氏、前掲書)。これはまた華藏院のこととして伝えられる(村上素道氏『永平二祖孤雲懷辨禅師』・比叡山延暦寺『比叡山』・塩入亮達氏『日本の霊場』)。

これに対して、中世古祥道氏は、寂場房をもって、道元得度の靈蹟とするのは、「公円が寂場房主故、当日叡山在住という一般的な臆見からの推測にすぎまい」という。つぎのとおりである。

「華頂要略所収の天台座主記によれば、公円の座主就任に就て次のよ

うに記している。

經<sup>ニ</sup>西塔釈迦堂前<sup>ニ</sup>……(筆者中略)……過<sup>ニ</sup>修禪<sup>ニ</sup>直著<sup>ニ</sup>横川<sup>ニ</sup>

但横川中堂無<sup>ニ</sup>拜堂<sup>ニ</sup>

先於<sup>ニ</sup>四季講堂<sup>ニ</sup>請<sup>ニ</sup>印鑑<sup>ニ</sup>

次被<sup>ニ</sup>度府<sup>ニ</sup>堅義者六人  
註記二人  
川人次饗膳儀事訖、次渡<sup>ニ</sup>東塔講堂<sup>ニ</sup>中堂等拜堂<sup>ニ</sup>住北谷  
竹林院云々

同十日被<sup>レ</sup>行<sup>ニ</sup>春季受戒<sup>ニ</sup>今日竹林院被<sup>レ</sup>行<sup>ニ</sup>講定<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>拜堂<sup>ニ</sup>  
住此房云々

この日は京都より登嶺し、西塔より横川に至り、転じて東塔に至り竹林院に宿しているが、大変な行程で、従って横川の中堂である中堂さえ拜堂を見えていない。直ちに四季講堂に入って座主の印鑑をうけている。

さて次の度政であるが、その具体的なことについては後にみようが、今、古伝に従い禪師の剃髪の場合を公円の当日の日程と照合すると、この場としか考えられない。もっともこれが剃髪の場合としても、これには「次被度政」とのみあって、別に場所を記さないのも、従来の伝の如く寂場房であるとの主張もされようが、この日程を虚心によめば、四季講堂でのことと解するほかになく、又、その日程からは、この堂を出でて他に向う余裕は考え難いのである。

されば建搢記が「夫諸ノ出家皆四月八日ニ落髮スルヲ以テ望ス、此ノ和尚ハ四月九日ニ落髮アル事ハ名童ニマシマス間タ、一山評議ヲ以テ押エ申スニ依テ、九日ノ不曉ニ密ニ御落髮アリ」という一山評議のための一日延期は、以上の公円の日程資料からみる限り、後の附会であるし、又天曉剃髪というも、公円が寂場房主故、当日叡山在住という一般的な臆見からの推測にすぎまい。

要するに禪師が建暦三年四月九日、公円について剃髪を認める限り、天曉落髮は認められないし、寂場房得度もありえない。その場合は横川四季講堂というほかない。四季講堂とは、定心房、又は大師堂とも称し、四季ここで論義がもたれたところからその名があり、弥勒菩薩を本尊とするが、今は元三大師をまつるという。(前掲書)

このように、道元の剃髪の旧跡については、寂場房と横川四季講堂との二説にわかれるのであるが、それはそれとして、いま横川解脱谷の寂場堂旧趾にある「承陽大師得度靈蹟」について、その由来と現状などを概説しておこう。

明治維新のころ、京都栗田口の青蓮院門跡、のちの天台座主・三井玄深大僧正は、横川解脱谷を道元得度の跡と確定し、その標柱をたてた。これがこの地をさだめた最初である。

明治二十五年(一八九二)十一月、この地に三玄みくろ(のち小川と改姓)見竜老師が中心となって、野尻とみ(野尻源右衛門の母)女史の寄金をえ、間口二間、奥行一間の土壇の中央に台石をすえ、一米ぐらゐの自然石の「承陽大師之塔」(比叡山恵日院住職、のち臨済宗に転じ永源寺派管長となった芦津実全老師の揮毫)を建立した。この石碑の裏面には、六行で「明治二十五年十一月 建塔主任越前国吉田郡靈山院住職三玄見竜 施主同国大野郡横枕村野尻源右衛門」としてある。

明治三十五年(一九〇二)五月、宮城県石巻市永巖寺住職三輪泰輪老師は、「承陽大師御旧蹟」(表面)、「陸中牡鹿郡石巻町永巖寺住職三輪泰輪」(裏面)と書いた木材の角塔婆をたてた。

明治四十二年（一九〇九）九月、長野市和合の昌禪寺住職佐藤達乗老師は、靈蹟碑の建立を企て、これを独力で完遂し、同四十三年一月十四日、大本山永平寺は、褒賞して、これにむくいた。これが、いまの「承陽大師得度靈蹟」（表面）碑である。表面の六字の左側に、やや小文字で「勅賜性海慈船禪師永平六十四世悟由」という森田悟由禪師の署名がある。裏面には、「明治四十二年九月建立 発願人越前国靈山院三玄見竜 同国横枕村野尻源左（右の誤り）衛門 主事信濃国昌禪寺佐藤達乗」と四行でしたためてある。

かねて近畿地区二府四県の宗務所長および宗会議員によって「道元禪師得度遺跡顕彰会」が組織され、管下の宗門寺院、全国の有志寺院の懇金と、宗門当局からの助成金、ならびに比叡山当局の支援で、石碑とその境域を、近代の構図をもって一新し、昭和四十一年十一月十六日午後二時、その落成除幕法要がいとなまれた。両大本山代表、宗門関係者、檀信徒ら二千数百人が参集し、当日の導師・曹洞宗宗務総長中村貞元老師によって啓白文がよまれた（『曹洞宗報』昭和四十二年一月号）。こうして現在におよんでいる。

比叡山が、道元の剃髪の地であることにちなみ、いまひとつつけ加えておかねばならないことがある。

かつて烏有に帰した大講堂の再建と、慈覚大師一千百年大遠忌とを合わせた慶讃大法要が挙行されるにあたって、ふたたび新大講堂に道元の本像を奉安することとなり、「道元禪師尊像奉安大法要」が、昭和三十八年四月二十五日午前十一時からおこなわれた。

新大講堂に奉安された道元の本像は、妙覚山誕生寺のそれを模写したものである。当日の参加者は、比叡山当局の要請もあって、曹洞宗管長高階瓏仙禪師、金剛宗一宗務総長以下内局部課長、地元選出の宗会議員、京都滋賀両府県の宗務所長、教区長、役職員、随喜寺院など総勢六十三名。その模様を、後日の参考までにしておく（『曹洞宗報』昭和三十八年六月号）。

一行は、四月二十四日午後上山、四月二十五日午前五時振鈴（起床）、午前九時半整儀、午前十時半書院出発。伶人の吹く法楽、梅花講員の唱える御詠歌は深山にこだまし、管長をのせた古式豊かな輿は、さながら平安朝の絵時図である。

書院から大講堂まで約五百米、先払、伶人、梅花講、送迎僧（天台宗）随喜衆、両班所長、管長（興）、侍局、内局、議員、来賓の順序でゆっくりと進み、このほか京都滋賀の檀信徒や梅花講員約千五百名が大講堂にあふれた。差定（式次第）と疏（表白文）とは、次のようである。

上香大展三拝、湯食三拝、嚩金菓三拝（この間奉詠花供養和讃）、茶鼓一通、

上香大展三拝、茶三拝、中揖三拝（奉詠花供養和讃）、三鼓、拈香、香語、開班、出班焼香、大衆九拝、両班歸位、宣疏、修証義（第四、五章）誦誦、行道一匝（八行引き）、略回向、普同三拝、管長猊下御垂示（南面着椅）、金剛宗務総長挨拶、天台執行挨拶、退堂。

高祖承陽大師本像を延暦寺大講堂に奉安するの疏（原漢文）  
陽光天に徧ぬし、四明嶽の雲は今日の瑞を識するに似たり。

薰風地を渡る、琵琶湖の水は果して昨夢の祥に応ず。

恭しく惟みれば、

曹洞宗今今日高祖承陽大師の尊像を天台宗総本山延暦寺大講堂に奉安するの令辰に相値う。

北嶺の秀峰は高祖承陽大師薙髪の靈地にして晨には心地を耕し夕べには教觀を学び研学修道の道場たり、此の因縁を以って曾て尊像を奉安し礼拝恭敬すと雖も、往年大講堂火難に遭い尊像も亦烏有に帰す、洵に惜しむに堪えたり、依て闍宗の心を協せ尊像を造営し堂中に安置し以って法乳の慈恩に酬いんものなり。

右伏て惟みれば、

比叡の頂きに登って、三諦円融の深きを探り、建仁の牀に坐しては、大乘真実の奥を究む。既に是れ世間の木鐸なり、何ぞ仏海の津梁に非ざらんや。

況んや又、

入宋万里の波濤は、諸仏出身の活路を虧闕し、出定一声の棒喝は、千聖不伝の心田を開明す、

空手還郷、身を以って道に徇い、

眼横鼻直、法の為に心を砕く、

天童の異苗、密かに吉祥山上に植え、

靈山の仏種、速かに扶桑國中に播く、

此に於いてか、

綿密の宗風を昂揚して、先師の遺囑に背かず、打坐の大道を实践して、

古仏の遠猷を全提す、

玲瓏巖下の法流は、鶴灣に注いで浩く、

大仏峰頭の月影は、松関に入って輝く、

誠に知る、

眼蔵の宝庫は竊に綿密の祖意を蓄え、  
伝光の秘録は頻に紹隆の機縁を挙す、

高德昭々として、万余の門葉は海内に弥漫し、  
芳躅歴々として、一乗の禪風は殊方に宣揚す、

今や覺苑花開くの吉辰なり、

尊影ここに安じて、遠く正治の往音を慕い、  
真儀在すが如し、直に昭和の今時を欣ぶ、

仰ぎ冀くは、

無私の靈鑒、微意を容納し、

覆蔭の悲願、児孫を擁護し玉はんことを。

謹んで疏

維時昭和三十八年 月 日

曹洞宗管長 玉堂瓏仙

謹んで疏

## 五、公胤僧正を訪ねた寺

みいでら  
三井寺

▲滋賀県大津市別所園城寺町



▲国鉄東海道線の大津駅から京阪バスで三井寺まで。あるいは京都の京阪三条から京阪京津線(電車)で浜大津下車、バスにのる。

道元は、建保二年(一二二四)十五歳、比叡山(山門)の仏教に失望し、三井寺に公胤をたずねて、求道上の疑問をただした。公胤の指示によって、ただちに入宋求法したといい、あるいは建仁寺の榮西に参じたともいう。

公胤は、建永元年(一二〇六)八月二十五日、松殿基房が仏事を修したときの導師をつとめ(『三長記』、また承元元年(一二〇七)十月二十一日、承門明院(在子)が久我通親の追善法要をおこなったとき講師となっている『明月記』)。乾坤院本『伝光録』は、「公胤僧正又外叔ナリ」とのべて、公胤は道元の母方の縁者であるという。公胤を訪ねたのは、おなじ血縁のひとつとみられる良頭(ろうとう)の誘液(ようえき)にあずかるところが大きかったのであろう。それと同時に、公胤もまた縁者であったことが、より一層の親近感を抱かせたのであろう。公胤は、元久三年(一二〇六)、承元三年(一二二二)、園城寺長吏(おんじょうじ)となり、学徳ともに叡山(えいざん)の座主をしのぐといわれたが、やがてのちに、法然の感化(かち)をうけ、他力浄土教に帰依した。しかし、現在、この三井寺には、道元の遺跡(いし)を伝える面影(おもかげ)は、なにひとつ残っていない。道元にまつわる歴史の寺というにとどまる。

ところで、三井寺は、正しくは、長等山園城寺(ながとうさんおんじょうじ)と号し、天台宗寺門派(てんたいしゅうじもんは)の本山である。西国第十四番の札所(ふだしよ)であり、京畿四大寺の一にかぞえられ、奈良の興福寺につぐ大寺とされた。

もと弘文天皇の旧御所で、開基は、壬申の乱(六七二)により自刃し

た弘文天皇の皇子、大友与多王が、田園城邑を投じて創建したところから、園城寺の名がある。また、三井とは御井、すなわち井戸のこと、いまの金堂裏にあるが、天智、天武、持統の三帝の御産湯に用いたので、御井の寺または三井寺として親しまれる。しかし、この関伽井戸は、三部灌頂儀式の法水に使用されるのである。

延暦寺円仁と三井寺円珍の両門派の間に対立を生じ、正暦四年(九九三)延暦寺と離れ、山門に対して寺門とよばれた。幾たびかの火災、焼討ちにあったが、現在の堂塔は、おおく豊臣、徳川両氏の造ったものと伝えられ、国宝、重要文化財の指定をうけている建物、仏像、書画など枚挙にいとまがないほど多く、名勝史跡にあてられている。

寺域は、琵琶湖を一望におさめ、比良、伊吹の秀峰をあおぐ。近江八景のひとつ「三井の晚鐘」、謡曲の「三井寺」でも知られる。

## 六、臨済禅を学んだ寺

### 建仁寺

▲京都府京都市東山区小松町

▲京都駅から市電で東山安井下車。南へ徒歩で約五分。円山公園や八坂神社に近い。

建仁寺は、建保二年(一二二四)ないし五年のころ、十五歳あるいは十八歳のころ、天台法門に訣別して、榮西の弟子明全に、四年ばかり、臨済の禅風を学んだ寺である。また、宋より帰国して、二、三年のあいだ仮寓したところでもある。しかし、ここもさきの三井寺とおなじく、

旧跡をあらわす遺品や標識などが、とくに在るわけではない。ただ、面影をしのぶだけの禅刹である。

けれども、道元以後、建仁寺と道元門下ならびに永平寺との間には、道元の縁をもって、室町時代には、明峯素哲（道元、懷葬、義介、瑩山、明峯と次第する）が、建仁寺開山栄西の塔主をつとめている（『洞谷記』）。また、享保二年（一七一七）の道元五百五十回遠忌、嘉永五年（一八五二）六百回遠忌には、建仁寺から永平寺へ、香資白銀拾枚などがおくられている。また、享保三年（一七一八）には、永平寺第五十世の玄透即中が、永平小清規を版行したとき、これに対して建仁寺住持東峻が偈を寄せている（笹岡自照氏著、前掲書）など、こうした往来は、江戸時代まで、たえることなくつづいてきたようである。

なお、建仁寺は、山号を洛東山（ちやくとうざん）といい、ひとの知るとおり、臨済宗建仁寺派の本山である。鎌倉幕府二代將軍源頼家が、建仁二年（一二〇二）、栄西に帰依して建てた、わが国最初の禅寺である。室町期には、五山文学の中心として知られ、京都五山の第三位であった。美術的文化財としては、俵屋宗達の紙本金地着色風神雷神図二曲屏風が有名。

土地のひとは「けんねんじはん」（建仁寺さんの意）と呼んで親しみ、建仁寺垣や、けんちん汁とともに庶民的な禅寺としての特長をもっている。

明全の塔もある。明全は、知られる通り、栄西の高弟であり、道元が師事したひとりであった。貞応二年（一二二三）、明全と道元はあいたずさえて入宋したが、不幸にして、明全は、天童山の了然寮で遷化してし

まった。それは宝慶元年（一二二五）五月七日のことであった。道元は、明全の舍利をもちかえったと伝えられる。明全の塔は、建仁寺の開山堂すなわち栄西の塔所護国院（ただし現今は護国院の名は無い）の前庭の片隅に建てられている。

## 七、入宋の地点

### 博多の津

▲福岡県福岡市。福岡県糸島郡二丈町。

貞応二年（一二二三）、二十四歳の道元が、明全や加藤景正その他のひとびととともに、宋へ渡った出航地点は、「博多之津」（貞応二年二月二十一日院宣）とされるされている。博多の津とは、いまのどこを指すかについては、一般に、那の津（博多大津とも呼ぶ）すなわち今の福岡市にある博多湾（鹿児島本線博多駅下車）であろうとされている。しかし、一説によれば、深江の津（福岡市二丈町、筑肥線筑前深江駅下車）ではないかともいう。いずれにせよ、たしかなことは、今後の研究をまたなければならぬ。

博多湾は、古くから日本の三大津のひとつとして知られた海外貿易港で、難波の三津浦を発航した遣唐使の船は、筑紫の大津の浦（博多大津）に寄港して、海路を唐へ向ったという。いまも「渡唐口跡」の碑がある。栄西も、この津から中国へ渡った。蒙古の大軍を防いだ元寇防塁の跡は、いまやほとんど消え去ろうとしている。

## 八、中国の禅利

太白名山天童景德禪寺および諸山

太白名山天童景德禪寺、略して天童山は、道元が、入宋してはじめて修行した名刹である。いまの東シナ海に面したチョーチャン（浙江）省のニンボー（寧波）とチェンハイ（鎮海）の中間に位置する。

南宋高宗の紹興四年（一一三四）、宏智正覚（一〇九一—一一五七）が伽藍を一新し、孝宗の淳熙十四年（一一八七）虚庵懷敏（榮西の師。榮西は、天竜山景德寺で、虚庵に嗣法した）が修築を加え、さらに清朝の順治十六年（一六五九）から康熙七年（一六六八）にかけて造営がなされた。

はじめ、道元が上山したときの住持は、無際了派（一一二四）であったが、再び掛錫したときは如浄（一一六三—一二二八）であった。南宋では、徑山興聖万寿寺（杭州臨安府）、阿育王山寶峯広利寺（明州慶元府）、太白山天童景德寺（明州慶元府）、北山景德靈隠寺（杭州臨安府）、南山浄慈報恩光孝寺（杭州臨安府）を、寺格の最上位として、これを五山として官寺に定め、これら諸寺の住持は官命によった。

それはそれとして、道元は、景德寺（天童寺とも呼ぶ）において、ときの住持・如浄のもとで身心脱落の宗教体験をえた。だから、景德寺こそ、道元の魂のふるさとであり、道元のいう正伝の仏法の根元地である。そのせいか、道元ののち、道元門下と景德寺との交流は、ある時期まで、断続的におこなわれてきたらしい。

たとえば、道元の直弟で、永平寺第三代の義介は、正元元年（一二五

九）に入宋したが、景德寺にのぼり、如浄の画像をはじめ、天童山図、規矩、法度、四節礼子などを将来したといい、また、宗可は、永平寺第五代義雲の命をうけて入元し、景德寺をたずね、同寺に安置してある道元の位牌を再調したという（『建徳記』）。また、永享七年（一四三五）、南英謙宗は、景德寺におもむいてその第三十七世となり、南九廊院を与えられた大瞞行杲の勅号を賜ったと伝えられている（『種月南英謙宗和尚行業記』）。また、その前年、永享六年、南英謙宗の弟子、瑚海仲珊は、景德寺にいたり、自費をもって如浄の塔所である南谷庵に灯油田を寄進した。これによって、景德寺当局は、以後、道元の門流が、天童景德寺に輪差することの免除を衆決した。瑚海仲珊は、かの地に滞在すること十九年にして帰ったという（『日本洞上聯燈録』卷六）。このような宗門の記録は、どこまでどのように信頼できるかは別として、景德寺とのつながりを示唆する文書が現存しているというこの事実は、かるがるしく扱えないであろう。また、山梨県東山梨郡大和村には、天童山景德院と名づける曹洞宗の寺院がある。

ところで、昭和九年夏、景德寺を訪れた藤吉慈海氏の『天童山巡礼記』（岩本秀雅氏著『教育者としての道元』所収）の一節を、私がほしきままに抜粋して、ありし日のおもかげを追想するよすがとしてみたい。

「……育王から天童への道は山裾の道である。やっと松並木の道にさしかかった。如何にも古刹への参道らしい気持がする。杉並木のつきる所に、『松風尚在』の扁額のある小さな三門がある。日本からも時々来訪する人があるらしい。この寺では一切なまぐさいものや酒等はのま

ぬようにと注意書がはってある。寺僧の案内で諸殿を拝観する。後方の山の上の諸堂へも廊下が通じていて、丁度越前の永平寺のようである。いや永平寺のあの山の景色がこの越山の天童山の風光に似ていた、この天童にかたどって永平寺が造営されたのであろう。越前の越は越の国の越である。道元が越前の山深く隠棲したのも彼がこの天童の風光忘れ難いものがあったからであろうと思うにつけ一入この大伽藍のすべてが懐かしく思われる。羅漢堂の横に釈尊の苦行の様子が土で造られていて、その横の柱には「此処便是雪山」等と書いた札が下っている。「此の処便是雪山」とは私が永らく求めていた語であった。いまこの天童にきてその原理ともなるべき「此処便是雪山」の語に接して、私は本当に嬉しかった。他の寺院においては多く坐禅とか念仏が併修せられているが、ここ天童のみは坐禅を専らとする道場である……」。

道元は、景德寺のほか、広利寺、万寿寺、光孝寺、明州大梅山護聖寺、台州、温州、昌国県補陀洛迦山などの各地を巡歴しているが、今となつては、その詳しい足跡を辿ることは、不可能であろう。道元は、嘉定十六年（一二二三）秋ごろ、景德寺に近い広利寺に詣でて、西天東地三十三祖の変相画をみている。また、シナ禅宗五山第一の万寿寺（いまのチョーチャン省ハンチョウ（杭州）から西へ約三十軒）でと、浙翁如琰（拙菴徳光の法嗣で無了派と法兄弟）と問答して、その力量を賞賛された。光孝寺（チョーチャン省テンタイ（天台）山。ニンポウから南へ約七十軒）では、ときの住持元顥に会い、その嗣書を閲覧し、深い感激をおぼえ

た。光孝寺から景德寺への帰路、やはりその近くにある護聖寺の旦過寮へ一泊して、唐代の名僧大梅法常が、一枝の梅花をさずける靈夢を感じた。台州の小翠岩にゆき、盤山思卓（大慧宗杲の法流で、無用淨全の法嗣）と商量を試みている。また、補陀羅迦山（東シナ海にうかぶ島。プート山、チョーチャン省に属する）に参拝した。ここにある補陀落山寺のちの普済寺）は、宣宗大中十二年（八五七）三たび入唐して日本に禅を伝えた慧萼が開いた、観音信仰の靈場であり、禅寺でもある。

#### 九、帰国上陸の地点

##### 肥後河尻

▲熊本県下益城郡富合村字杉島

▲鹿児島本線川尻駅下車。南方へ徒歩で二十分あまり。緑川と加勢川の平行する地点、国道三号線のちかく、鹿児島本線寄りの田圃のなかに、観音寺がある。

ちょっと、お断りしておかなければならないが、道元が宋から帰国上陸した地点については、諸説があつて一定しない。

天文本『建徳記』は、肥後国「河尻之大渡」とし、『永平開山道元和尚行録』は、「筑之前州博多」とし、『延宝伝灯録』は、「太宰府」に着いたとし、安川浄生氏は薩摩の「坊の津」という。しかし、今日、もっとも広くおこなわれているのは、『訂補建徳記』のしるす「肥後州河尻」説である。そこで、いまは、この肥後州河尻説を一応かかげておくが、上陸地点の確定は今後の課題であらう。

さて、一般に、道元は、安貞元年（一二二七）秋、二十八歳、この河

尻の港に帰着したと伝えられる。帰路の途中、暴風雨にあい、あわや難波というとき、道元が、船上に端坐したところ、忽ち観音菩薩が、蓮葉にのって海上にうかび、風波がおだやかになり、無事に危急をさけることができたという。道元は、この功德に感じて、船板に観音像を刻み、河尻の津で開眼供養をおこなった。現在の杉島お船手一帯を「開眼の浜」（沖の塘という海岸）とよばれているのは、そのためらしい。

また、この観音菩薩にちなみ、一葉観音を本尊とする南湊山観音寺（現在の熊本県下益城郡富合村杉島）が建立されたというのは宗門でおこなわれている説である。然し、土地の口碑によれば、南湊山観音寺は、百済僧目羅の開創とも言い、本尊の如意輪観世音菩薩は聖徳太子の作、また、脇立の毘沙門、増長の二天は運慶、湛慶の刀、もと奈良の華嚴宗西大寺の支院であったが、のち、天台宗比叡山延暦寺末正覚院法統として隆盛をみたという（小山正氏著『大慈寺記』）。とすれば、この寺は、道元帰着のまえから、この地に存在していたのであって、道元の開創した寺ではないことになる。いま、観音寺の荒廃は甚しくみる影もない。昭和四十七年七月、観音寺を訪問した駒沢女子短期大学上田祖峯教授によれば、同寺は、山門も庫裡もなく、わずかに四間四面の瓦葺一棟の本堂だけが、田圃のなかに建っている古い小院内で、住職は欠けているように、先代住職の未亡人らしい老婆が、堂守をしており、この老婆の語るところによると、観音寺は真言宗に属しているということである。また、道元が船板に刻みこんだといういわゆる観音像（船板観音、一葉観音ともいう）は、その後、同寺の僧が、道元に賛を請い、これを流布した。

上部に、賛があつて、「一花五葉開、一葉一如來、弘誓是深海、回向運善財、仁治壬寅歲、九月初一日、沙門道元賛」とみえ、下部に、「船板観音海上安穩守護の尊像」「観音寺宝物」と読める。原板は、観音寺の寺宝として、御船手区長の保管するところとなった。私は、上田教授が観音寺からおくられた木版刷の船板観音像を、同教授から閲覧の機を得たが、これはかなり後世の作品であろうとの印象を強くうけた。

昭和三十九年（一九六四）、観音寺境内に「道元禪師帰朝上陸靈地」の碑が建てられた。碑は、境内に入つて参道の右側、境内塞地のなかにある。自然石の碑の正面には、「曹洞宗高祖承陽大師 道元禪師帰朝上陸靈地、永平現住泰禪書□□」とされる、その下部の御影石には、船板観音縁起と題して、「この地は安貞の昔鎮西の名刹大慈寺開山寒巖禪師の本師道元禪師中国より御帰朝の途次海上暴風起こり師船上に観音経を誦誦すれば観音大士蓮葉に乗じて海面に浮ぶと共に風波治まり肥後川尻開眼の浜に安着す船板観音は実にその影を写せるものにて史上千載に輝ける曹洞宗初一步の靈場たり。さきに昭和十四年六月熊本県史跡指定を受く今回大方の芳志を得て碑を建ててその由来を明かにし、宗祖の偉蹟を顕彰し以て思想善導に資す」と正面にしるされ、この面の左側には、「昭和卅九年四月一日 発願主大慈寺九十五世烏羽瀬保道 発願者大慈禪寺総代下田曲水 熊本県下益城郡富合村高見重光」としるされ、また縁起をしるした後背面には、「国分寺、静安寺、浄国寺、安国寺、報恩寺、流長院、宗禪寺」と彫りつけてある。

河尻の津は、緑川の水をむかえいれる肥後で最も古い河港である。

「開懷世利」<sup>かゐせり</sup>とも書き、むかしから西海肥州の要津として、内外の船舶が、にぎやかに出入した。細川藩時代は、水軍の根拠地となり、西南の役には西郷の本營が設けられ、さらに明治時代には、物資の集散地として大いに栄えたが、交通事情の大幅な変革にもなつて、いまは熊本市から阿蘇方面への通過地点というにとどまり、さみしい街道筋となっている。また、この地は鋳物や農具の製造で、知られている。なお、河尻のちかく野田町（国鉄の川尻駅から東へあるいて約十分）には道元の門下で、宋から帰り、この地に教線を布いた寒巖義尹<sup>かんがんぎいん</sup>（一三〇〇寂）の開創になる古刹、大慈寺がある。

これは余談であるが、道元は、入宋する前後のいずれかはともかくとして、九州の各地を巡観したらしい。それは、九州の各地に語り伝えられる道元の伝説や遺跡などによって想像することができる。

安川浄生氏によれば（『道元禪師入宋<sup>帰朝</sup>地点の研究』）、福岡県糸島郡二丈町上深江には、「道元<sup>どうげん</sup>」と呼ぶ部落がある。また、この地方には、道元の生家「久我<sup>こが</sup>」姓を名乗る者がおり、久我家の家紋「笹竜胆<sup>ささりゅうどう</sup>」（久我竜胆ともよぶ）をもちいる家もある。「道元の墓跡」とされている場所も現存する。また、福岡県水巻町猪熊には、道元が帰朝のとき、村民の請に応じて悪病退散のため建てた地藏堂がのこっている。また、筑前地方には、入宋のため博多へ来ていた道元が、悪蛇から娘の苦難を救ったというはなしがある。また、博多の明光寺には、「道元念仏之作」と署名をもつ木魚が現蔵されている。私は、昭和四十八年五月、九州大学での学会のついで、水島剣城老師を訪い、拝見させていただいた。これらの事実とは、

道元と九州との密接なつながりを示す証左であろう。鎮西の俗弟子楊光秀（『現成公案』末尾）や太宰府の野公大夫（『永平広録』第八）は、おそらく、道元が九州滞在中の旧知であろうから、道元にとって九州はことのほか縁が深い（拙稿『道元禪師と九州』『中外日報』昭和四十七年二月九、十、十一日付）。また、九州には道元の真筆ないし真筆と伝えられるもの、宋から将来した経典・祖録類、仏具類など、自縫の袈裟などを秘蔵している寺院がある（拙稿『道元禪師の撰述類とその問題点』駒沢女子短期大学『研究紀要』第五号）。

#### 十、深草閑居の跡

##### 安養院<sup>あんやういん</sup>

▲京都府京都市伏見区西槇尾町 清涼山欣浄寺<sup>せいりょうしんじようじ</sup>

▲京都駅から奈良線で丹波橋から京阪三条へゆき、墨染駅下車。徒歩二分。墨染寺<sup>すみぞめ</sup>のとなり。

帰朝した道元が、三年間ばかり、建仁寺へ仮寓したあと、約二年間、即ち、寛喜二年（一二三〇）同三年、三十一・二歳のころ、ここへ閑居していたという。『永平広録』第十閑居偶作に「深草閑居夜雨声」の一語が見え、また寛喜三年（一二三一）七月、了然に与えた伝自筆法語の奥書に「住安養院」とある。しかし、安養院を極楽寺の別院の安養院と断定したのは面山瑞方をもってはじまりとする（『訂補建徳記』）。この安養院のあとは、いまの清涼山欣浄寺（曹洞宗）が、その地にあたるといふ。建仁寺から南へ約六、七軒の地にあり、ふつう「墨染の欣浄寺」という名で有名。欣浄寺は、桓武天皇のころ、深草四位少将義宣が、この地を賜わり、

邸宅を建てたが、弘仁三年（八一二）、義宣が死去したので、遺骸を葬り、一寺を建立して、竹林山安養院と号した。この深草少将は、小野小町に恋いこがれて百夜通いの願をたて、九十九夜通いつめ、あと一日で満願という日に、大雪で凍死したという悲恋哀話の主人公である。謡曲「通小町」は人口に膾炙している。

かよう深草 百夜のなさけ 小町恋しや涙の水は いまもわきます欣浄寺（西条八十）

この寺の隣接地に、日蓮宗の墨染寺があり、また墨染池とよぶ池があり、池の向うに、少将と小町の二基の墓があり、うしろに裏門があつて、その古い石柱に「ふかくさ寺」としてある。墨染寺と欣浄寺との関係およびふかくさ寺とのつながりは、はっきりしたことがわからない（大山興隆氏『祖跡巡拝記』『曹洞宗報』・昭和四十五年十月号）。

僧正遍照は、のちに叡山を下って、この安養院に住し、仁明天皇追福のため、不断念仏堂をたて、仁和三年（八八七）知行百石の念仏料を下賜された。寛平三年（八九一）正月、関白藤原基経の遺骸をうめて、伽藍を整備し、真言宗に属したが、その後は兵火で荒れ、徳川時代に浄土宗となり、清涼山欣浄寺と呼んだ。古今集（九〇五）に、

堀河の太政大臣（藤原基経）の公みまかりける時に 深草山にをさめてけるのちに

深草の野辺のさくらし心あらば

この春ばかり墨染に咲け

（上野岑雄）

とあり、寺内の古桜を墨染とよんで、地名がこの和歌に由来するともいう。ただし、いまの墨染寺は日秀が天正年間（一五七三—一五九一）に建立した。

文化年間、曹洞宗の天照禰瑞が、祖蹟顕彰を企て、小伽藍をたて、道元が深草で閑居した跡であることを表示するため「生死可憐雲変更 迷途覚路夢中行 唯留一事醒猶記 深草閑居夜雨声」の閑居詩碑を境内に建立した。安政のはじめ、江戸の賢崇寺の風外が、五百兩を割いて祠堂金にあて、曹洞宗に寺籍の編入をまとめ、安政三年（一八五六）十一月二十八日に許可、大本山永平寺直末となる。鳥羽伏見の戦いで焼けたあとの仮本堂に、一丈六尺の廬舎那仏が奉安してある。伏見大仏とよばれ親しまれている。昭和四十八年十一月、私が拝登したとき、ちょうど改築中であつた。

## 十一、初開道場の跡

### 深草の興聖寺

▲京都市京都市伏見区深草宝塔寺山町 深草山宝塔寺（日蓮宗）

▲国鉄奈良線稲荷駅で下車、南東へ徒歩で五分ばかり、踏切を左へ折れた正面。あるいは京阪電鉄深草駅の南東およそ徒歩で五分。

これは、深草の興聖寺であつて、いまの宇治市に在る興聖寺ではない。深草の興聖寺は、三十四歳の道元が、天福元年（一二三三）の春、竣工落成した初開道場であり、わが国最初の純粹の坐禪道場である。道元は、ここで、寛元元年（一二四三）、越前にはいる十余年をすごし、在俗を接化し、弟子を養育し、『正法眼蔵摩訶般若波羅蜜』をはじめ、多く

の撰述をのこした。興聖寺は、山号を徳輝山となえ(『雍州府志』)、はじめ観音導利院(『普勸坐禅儀』)、やがて観音導利興聖宝林寺(『正法寺本』『正法眼蔵都機』)、あるいは観音導利興聖護国寺(『重雲堂式』)と名づけられた。道元は、越前へ赴くにあたって、弟子の義準に後事を托したが、ほどなく伽藍は回禄に帰し、義準は真言宗に転じ、その後の消息は、歴史の彼方に消え去ってしまった。

さて、この深草の興聖寺の位置は、どこであったのかというに、道元みずから「深草辺極楽寺之内」(『宇治観音導利院僧堂勸進之疏』天正本『建擲記』)とのべている。また古伝も「洛陽宇治ノ郡深草ノ里極楽寺辺ニ居ス」(乾坤院本『伝光録』)という。広く依用されている『訂補建擲記』では、「深草ノ辺、極楽寺ノ旧址ニ得タリ」となっている。すなわち前の二書は、極楽寺の内(境内)といい、極楽寺の辺(近隣)といって、その当時まだ極楽寺が現存していたことを想像させるが、後の一書は、極楽寺の旧址というから、文字どおりもと建っていた旧跡を指すことになる。史料的には、前の二書により信頼性がおかれるであろう。

ところで、その極楽寺町とは、『山城名勝志』によると、いまの深草山宝塔寺の「門前」一帯を指し、このあたりに、「大門」、「鐘楼」、「薬師堂畑」などの地名がのこっており、また極楽寺の十三塔が応仁二年(一四六八)の八月四日、大風のため吹き折れたとあって、その寺域がかなり広大であったことを偲ばせる。

いったい、極楽寺は、仁明天皇のなくした琴の爪を捜そうとした幼年の藤原基経(八三六―八九一)が、仏に祈って、もしかえば、寺院を建

立すると誓ったけれども、ついに果すことをえず、長子の時平(八七一―九〇九)が創立したという。時平は、前後八年の歳月をかけて完成させたが、昌泰二年(八九九)、菅原道真に作らせた奏請文をもって、朝廷に願ひ、定額寺に列した。開基は、修験道の中興と仰がれ、貞観寺座主や東寺長者になった真言宗の聖宝法師すなわち理源大師である。真言宗の良桂律師が住していたが、その後、徳治二年(一三〇七)、日蓮の門流である日像(一二六九―一三四二)と宗論のすえ、良桂は日像に敗れて、日蓮宗に改め、康永元年(一三四二)日像を葬って鶴林寺と呼び、また、日像の書いた法華題目の塔を建てた。いまの宝塔寺である。良桂から七代で中絶した。天正中(一五七三―一五九一)日蓮宗妙顕寺の住職・日堯の弟子・日銀が再興して、その末寺となったが、境内に数か寺のいわゆる塔頭を擁している。宝塔寺の近辺には、元政の瑞光寺(明暦元年・一六五五)宝治(一二四七―一二四八)年間、円空の建てた真宗院、文徳天皇のたてた嘉祥寺(仁寿元年・八五二)、貞観寺(貞観四年・八六二)跡などがあるが、これらの寺院と極楽寺との関係を知る史料に乏しい現段階では、興聖寺の旧跡の確定は、今後の調査にまかせるほかない。最近、守屋茂博士は、慶滋保胤(九九七没)の『本朝文科』に「極楽寺の禅房」「寺の西北に一仙洞あり」(原漢文)とあることから手がかりをえて、数次に亘る現地踏査のほか、関係文書や地方史研究家および宗門人の協力などをまとめて、保胤のいう一仙洞こそ観音導利院であると推定した。それは、即ち「もとの大和大路の西、深草極楽寺と同野手町辺りにあった極楽寺跡の北方であって、稻荷大社の南に当たるもとの



大和大路の北、深草大門町の西部と、同藪之内町の一部（図絵によると門前（西向）の道にそうて細流が画かれて居り、今もなお細流が大門町分を除いて、方形の境内を想定すると約二二、〇〇〇平方メートルとなる。標高三〇、九―三四、四）を含む地域ではなかったかと思われる。（守屋茂博士『道元禅師初開の道場興聖寺の跡を探る』『中外日報』・昭和四七年八月二十五、二十六、二十七付）数年前、この興聖寺跡と思われる境内の西北隅の俗に寺跡といわれるところで、古瓦の堆積した中から、鎌倉時代の鎧瓦が発見されたりなどしたという。いまの宝塔寺の近くに興聖寺が建てられたというところだけはまちがいないといってよからう。これという標識もないのは遺憾である。

#### 宇治の興聖寺

▲京都府宇治市宇治町山田

▲京都駅から国鉄奈良線宇治ゆきで終点下車。徒歩で約十三分。宇治川右岸にある。「興聖寺」の大石標と「曹洞宗高祖道元禅師初開之道場」とかいた新しい石標がある。

宇治市の興聖寺は、山号を仏徳山とよぶ。慶安元年（一六四八）とも二年ともいうが、山城国淀の城主永井尚政の本願によって、さきに廃絶していた興聖寺を再興する主旨のもとに、寒巖義尹の法系、万安英種をむかえて中興開山とした。したがって、事実上、万安は、宇治の興聖寺の開山第一祖であるが、歴代住職は、開山永平道元、二世孤雲懷辨、三世徹通義介、四世寒巖義尹とし、みずからは五世中興としている。

興聖寺の開山堂には道元の本像が安置され、開山塔には道元の遺骨が奉安されてある。開山堂は、本尊に向って右方の高台にある一字で、内部に「老梅庵」の扁額がかかっている。その中央に、竹椅子に坐する等身大の本像が道元である。この道元像は、興聖寺第十六世直指玄端が、宝暦二年（一七五二）道元五百回忌を修行するにあたり、建仁寺へ懇願して移したものである。もともと安置してあった道元像は、淀の東運寺へ運び、同等では同寺の開山でもある万安英種の真像として礼拝をさげているということである。また、建仁寺から移された興聖寺開山堂の道元像は、もともと道元の法嗣、詮慧・経豪の本拠地、永興寺の本尊であった。永興寺は、南北朝時代すでに荒廃し、のち、いまの東山高台寺に吸収された。慶長十年（一六〇五）、高台寺ともども臨済宗建仁寺末となり、ときの高台寺住職三江紹益は、この像を建仁寺に奉安し、栄西の像の横に座を設けた。そうであるからには、興聖寺の道元本像は、きわめて由緒深いものであることがわかる。

つぎは、開山塔の道元遺骨である。この遺骨は、明治十二年（一八七九）五月三日、永平寺の祖廟・承陽殿が全焼したとき、その祖像安置の壇の下から発掘されたのを、それよりさき明治十年ごろ、かねて興聖寺第三十四世不二門眉柏老師が、興聖寺へ拝請したいと望んでいたこともあって、永平寺より渡されたのである。ときの永平寺住職は、興聖寺から晋住した久我環溪禅師であった。

明治十二年五月、永平寺承陽殿の焼け跡から発掘された道元の骨壺は、蓋は破損していたが、蓋の裏側に、「加藤四郎左衛門景正謹作」とあ

り、壺は芋頭の型であった。承陽殿再建の折、蓋は陶祖藤四郎の子孫によってつくられ、また予備のため同型の壺を二個つくり、一個は新しい場所におさめられ、一個は永平寺の宝庫に現存している。

一方、永平寺から道元の遺骨を受けた興聖寺では、明治三十八年（一九〇五）一月二十六日、開山堂の地下に埋納した。この骨壺は、陶祖景正より第三十五代目加藤亮吉氏の作で、かたちは円筒型、高さ五寸、直径二寸五分、蓋は三重造り、壺の正面には、藍の染めつけで、「開山高祖承陽大師御靈骨」とあり、その右側に「山城国久世郡宇治町 大日本曹洞宗初開道場 興聖宝林禅寺」、左側は「明治三十七年九月一日 現住三十五代 西野石梁謹記」と三行にしたため、別面には「大日本国陶祖景正春慶翁 三十五嫡裔尾張国瀬戸町 天籟園現主 加藤亮吉景素敬工」とある。この骨壺をおさめる木箱には、「明治三十八年一月二十六日改納開山塔下」とするす。一月二十六日は、道元の誕生日（正月二日を太陽暦で換算）である。

なお、興聖寺に保存する骨壺は、茶入れとして有名な久我肩衝こがかつきに似ている。伝説によれば、久我肩衝は、道元が帰国するとき、久我家への土産として将来したものであるという。久我家秘蔵の「久我肩衝」は、足利時代の末期に、京都の数奇者として有名な鉢尾紹珍の手にわたり、ついで豊臣秀吉から、大阪城落城以降は、尾張徳川家の所有に帰し、元禄十年（一六九七）綱吉が大和郡山城主柳沢吉保に与え、明治初年（一八六八）、松浦伯爵家の蔵するところとなり、現在に至っている（笛岡自照氏著『道元禅師御旧蹟めぐり』）。

はなしは前後するが、宇治の興聖寺の総門（石門とよばれる）は、宇治川に臨んで立つ四脚門である。総門をくぐって、切りどおしのような坂道をのぼりつめると、はじめて唐風の山門がみえる。この坂道が名高い琴坂ことざかで、その左右には、かえで、姫つつじ、桜、山吹などが植えられて、四季おりおりの美しさを添えている。さて、山門を入ると、正面に本堂、右に庫院と鐘楼、左に僧堂と衆寮という伽藍配置で、趣きに富む建物がみえる。曹洞宗の典型的な伽藍形式である。

興聖寺の晩鐘、春岸の山吹は、宇治十二景のひとつとしてたたえられている。あたりには、黄蘗山万福寺、平等院、宇治橋断碑などの古跡をひかえている。さきの深草の興聖寺とは、およそ八杆へだたっている。

いまひとつ付言しておきたいのは、朽木くつきの興聖寺こうしょうじである。朽木の興聖寺は、滋賀県高島郡朽木村大字岩瀬（江若鉄道安曇川駅下車）にあり、もちろん曹洞宗の寺院である。同寺の『年譜』によれば、開闢は道元となっている。また、開山は孤雲懷辨となっているが、勧請開山の意である。また、開基は佐々木近江守信綱である。第一世は永平寺第十八世大梁祚棟、第二世は永平寺第十九世竜眠祚球（慶長十五年正月二十二日寂）、第三世は永平寺第二十二世大説常智（寛永八年十月二十六日寂）、第四世は永平寺第二十三世仏山徳照（寛永十八年二月一日寂）、第五世は陽山梅春（十月二十一日寂）第六世嶺室素雪（明暦二年七月五日寂）（栗山泰音氏著『総持寺史』）となって現在に及ぶ。もっとも、現在の第二十九世住職森泰翁老師によれば、文久年間に山門、書庫が焼失し、「永平一

九世？素球大和尚が当山に隠居されて以来初めて独住世代になって居る（森氏の書信による）とのことだから、正確なことははっきりしないにしても、第十五世紀の後半から、朽木の興聖寺の歴史がはじまったことは確かであろう。だから、その点では、宇治の興聖寺より成立は古い。面山は、深草の興聖寺を朽木谷に移したと言っている（『面山和尚広録』）が、この説はややあやしい。朽木は古い歴史をもつ村落で、俗に足利庭園（足利義晴の仮座所の遺構）とよばれる興聖寺境内秀隣寺庭園（名勝）があり、また近江耶馬溪ともいう朽木溪谷は、夏のあゆ釣り、秋の紅葉狩りで親しまれている。ちかくに、中江藤樹書院跡がある。

## 十二、在俗交流の地

### 六波羅蜜寺他

▲六波羅蜜寺は京都府京都市東山区轡轡町

▲六波羅蜜寺は市電・バスで河原町松原または清水道下車。西へ徒歩約十分。

ここに在俗交流の地というのは、建仁寺、安養院、興聖寺のほか、京都に住中の道元が活動した場所を、文献史料によってあとづけてみた場所のことに意味する。

道元は、四十三歳、仁治三年（一二四二）十二月七日（一本は、十二月十七日、十二月二十七日とする）、雍州六波羅蜜寺の側ら、前の雲州刺史すなわち波多野義重の幕下で、『正法眼蔵全機』一卷を示衆し、翌寛元元年四月二十九日、六波羅蜜寺に在って『正法眼蔵古仏心』一卷を示衆し

たことが、それぞれの奥書にみえている。また、道元は、仁治三年四月十二日、近衛殿おそらくは前関白近衛兼経に謁して法談を行ない（『建撰記』、あるいは紳縷に交わって、和歌の会に臨んだこともあったようである（『新後拾遺和歌集』、『藤葉和歌集』）。

六波羅蜜寺のそばの波多野義重の邸宅あと、そのほか道元が足をはこんで諸人と交わりをむすんだ場所がどこであるかは、一向に確かめようもなく、このあたりを訪ねて、往昔のさまを、勝手に想像するほかない。

補陀落山六波羅蜜寺は、新義真言宗智山派に属している。また、西国第十七番の札所である。六波羅はひともしるように、頼朝以来、探題役所の所在地としての歴史をもつ。この寺は、もと小さな地藏堂であったが、天暦五年（九一五）、伝染病退散の祈願をこめて、空也が十一面観音を刻み、鴨川の東岸に、この寺を再興し、西光寺とよんだ。すなわち、開基は空也、本尊は十一面観音、そして、現在は真言宗である。そもそも、この寺のあたり一帯は、鴨川（加茂川）べりから鳥辺野にかけて葬送の地であった。のち、足利義詮が貞治年間（一三六三―一三六七）勧進して、堂塔を修理し、このとき真言宗に改め、また豊臣秀吉などの外護もあったが、明治以降、しだいに衰微した。しかし、東山の中心地に位置して町のなかにあり、文字通り庶民の寺というべきであろう。本堂は、室町時代初期の典型的建造物として貴重であり、口から六体の化仏を吐き出す空也像、運慶、湛慶らの木造坐像、平清盛像など、寺の規模は小さいが、多くの文化財がある。建仁寺、清水寺、八坂の塔がちか

い。

### 十三、入越最初の古精舎

きつぼうじ  
吉峰寺  
としみねでら

▲福井県吉田郡上志比村字吉峰よしみな

▲福井駅から京福電鉄大野線で越前竹原駅下車。右の山手へ約二軒ゆくと木造の簡素な総門があって「高祖入越最初之道場」と標示してあり、さらにおよそ五百米ばかり葛折の坂道をのぼると、たどりつく。

道元は、波多野義重の勧誘によって、その所領である越前の志比庄に招かれ、「安閑の古寺」「吉峰古精舎」に到着した。この吉峰寺は、禅師峯とともに白山天台系の子院ではなかったかという見解がある。（今枝愛真博士著『道元』寛元元年（一二四三）七月の末、かぞえて四十四歳。同年の閏七月一日、ここから東南へ約十五軒にある禅師やまし峯頭に赴き、越前ではじめて『正法眼蔵三界唯心』一巻の示衆を行ない、九月再び吉峰古精舎へ戻り、さらに十一月、十二月、禅師峯寺、吉峰古精舎で、正法眼蔵を示衆、寛元二年二月なかばごろまで、弟子たちと修行生活をおくった。また、寛元二年二月二十五日、吉峰の天神社に参詣している。こうして、道元は、この間、吉峰古精舎と禅師峯寺とを、ひんばんに往来しているようである。

その後の吉峰寺は、ずっと無住で、跡かたもなくなっていた。正徳年間（一七一十一―一七一五）福井県吉田郡松岡町の天竜寺第二世・雄峯智英は、同寺の大檀那の松岡城主に告げて、祖跡の再興をもくろみ、ここ

に一庵を建立した。明治になって、田中仏心老師が、再び祖跡再興を發願し、二間四面の觀音堂に住んで、托鉢行願による血涙の難行に耐えぬくこと十年、大野横枕の野尻源左衛門氏の特志によって用地の提供をうけ、その素志を貫徹した。すなわち、明治二十五年（一八九二）、仏心氏二十六歳のとき、吉峰寺の再興を發願。同二十九年十一月、吉峰寺の寺号を公称、翌三十年、八畳四間の建物をつくり、その一間を仏間として仮入仏式を挙げ、「老梅山」と山号をつけた。明治三十一年八月十八日、曹洞宗管長から、吉峰寺特選住職の任命をうけ、同三十二年二月、福井県知事より本堂再建の寄附勸募の許可をえて、資金調達に没頭し、こえて三十六年、道元六百五十回忌にあたり、本堂を落成した。老梅山吉峯寺の世代は、再興始祖として、ときの永平寺第六十四世大休悟由、第二世は鉄叟春堂、第三世は大芳梅堅、第四世はみずからの師・巨海友道をあおぎ、みずからは第五世においた。いまの本堂は、昭和にはいつて改築したので、明治の面影を失った。仏心氏は、山形県東置賜郡大塚村の出身。大正三年（一九一四）八月、四十八歳で遷化。

吉峰寺の法堂裏には、道元の坐禅石が伝えられ、白山権現の白山水も残っている。吉峰寺から大仏寺跡を経て永平寺までは峰づたいに十六軒ばかり、禅師峯寺も遠くはない。

### 十四、禅師峰下の茅庵

ぜんじぶじ  
禅師峯寺

▲福井県大野市西大月町

▲福井駅より京福電鉄で大野線の新在家駅下車。右の山手へ徒歩五分ばかりゆくと、山麓にみえる。

この寺での、道元の動静は、直前にかいたことが記録に残っているだけである。大仏寺のちの永平寺を創建する三か月ばかり、道元は、ここに住居した。もとは、山師峰とかき、のち禅師峯とかいたが、山師とは山法師のことつまり比叡山の法師を指す『訂補建誓記』というから、やはり近くの平泉寺と無関係の寺ではなかったであろう。禅師峯寺は平泉寺のふもとにある。現今の禅師峯寺もまた、明治四十年（一九〇七）ごろ、田中仏心氏の再建になるが、この地が、はたして原初の寺址であるかどうかは、確かめられていない。

## 十五、根本道場

### 吉祥山永平寺（曹洞宗大本山永平寺）

▲福井県吉田郡永平寺町字志比

▲国鉄北陸本線の福井駅から京福電鉄の京福大野ゆきにより、東古市でのりかえ、永平寺駅下車。福井駅から永平寺まで直通の便もある。この間の所要時間およそ四十分。両側に土産物屋のたちならぶ、ゆるやかな勾配の参道をのぼると、五分ばかりで永平寺の総門につく。参道の途中に小さな半杓橋がかかっている。なお、北陸本線の金津からも京福電鉄の永平寺ゆきが出ており、また福井からバスの便もある。

永平寺は、道元によって開かれた、坐禅の根本道場である。

「今日より未来際を尽すまで」「当山を離れず」（天正本『建誓記』（原文）と誓ったほど、ここは理想の地であった。この寺が、道元にとつてどんな意味をもっているかは、これ以上のことばは必要がない。道元

は、この山をこよなく愛した。この山の水や雲や樹木が好きだった。この山の生活にひたりきったのである。『正法眼蔵春秋』をはじめ多くの撰述をのこし、立派な弟子たちを育て、坐禅の修行に専念した。もっとも安定した、もっとも充実した生活が、永平寺での十年間であったといえよう。道元といえは永平寺、永平寺といえは道元、永平寺は道元そのものだといってよい。

道元は、在俗信者の大檀那・波多野義重らの外護をうけて、寛元二年（一二四四）七月、四十五歳、傘松峯大仏寺を創めた。大仏寺は波多野義重すなわち如是居士の号である。この如是居士の開基であるところから、大仏寺と名づけた（面山瑞方撰『訂補建誓記』という。そもそも、二位の尼將軍・北条政子と右大臣実朝の菩提をとむらうために建立された（面山『訂補建誓記』補註）。そうして、寛元四年六月十五日、大仏寺を永平寺に、また宝治二年（一二四八）十一月一日、傘松峯（傘松は地名。天正本『建誓記』は吉祥山と改称した。爾来、この寺は、吉祥山永平寺とよばれて、今日にいたる。

道元が、この山を吉祥山と改めたのは、「帝釈宮ノ名」と「仏成道時、敷吉祥草（給ウ）ことに因んで、「伽藍ヲ建立スル処吉祥也」となったのである（『建誓記』）。吉祥とは、もろもろのほとけたちの功德を指し、もろもろのほとけたちといっしょに生活する場所を言うのにほかならない（永平寺蔵・宝治二年十一月一日、道元書）。

つぎに、永平寺の寺号については、道元みづから記したものがない。しかし、永平寺と改めた日に上堂して、この世に釈尊が「降生」して、

「天上天下唯我独尊」と宣言したことに和して「天上天下当処永平」と唱えている（『永平広録』巻二）。このことは、道元が、永平寺を、わが日本仏教の原始であり、総府であり、革新であるとの信念をもっていたことを示しているといつてよい。加うるに、永平寺の嘉暦二年（一二二七）の梵鐘には、「永平」は「仏法東漸」の「曆号」であり、「扶桑創建」の「祖蹤」であるとする銘文が刻まれている。まさに、永平は仏法が中国に伝来されたという後漢の明帝永平十年（六七）の年号であって、この仏法東漸といま永平寺の建立とは、ひとしく全てのものの新生を意味する。けだし、永平とは、永遠の平和をあらわした名称とうけとってよいであろう。ここには、人類の理想が象徴され、生きとし生けるものの祈念がこめられている。

さて、大仏寺と永平寺との関係については、ふたつのこととなる学説がある。永平寺の通用門のそばに、嘉永四年（一八五一）に建てた「大仏寺旧蹟 従是五十丁」と彫った石柱がある。事実、いまの永平寺から約五杆の山奥に、四囲四十米あまりの平地がある。これが大仏寺旧蹟といわれている場所である。いまの永平寺は、はじめこの大仏寺のところにあったが、のちに現在地に移転したとする説（大久保道舟博士著『道元禅師伝の研究』。小林準道老師説）と、永平寺はその草創当初から、いまの場所に建立されたとする説（横山秀哉博士稿『曹洞宗伽藍配置の研究』。笛岡自照老師著『永平寺雑考』）とである。

永平寺は、開山第一代道元、第二代懷持、第三代義介、第四代義演のあと、大野の宝慶寺を開いた寂円の子・義雲が第五代となるにおよん

で、曇希、以一、喜純、宗吾、永智、祖機、了鑑、建綱、建擲、光周、宗縁、以貫、祚棟、祚玖、門鶴、宗奕、祚天、秀察、竜札、良頓、英俊、門渚、鉄州、知堂、尊海、愚門、徹応、香郁、晃全、本祝、天梁、巖柳にいたる三十八代、ほぼ四百年間は、ことごとく寂円派の系統が、その住持職を独占してきた（本多喜禅老師編著『宝慶寺誌』）。もちろん、その後は各門派から晋住していまに及ぶ。

また、この寺の七百数十年間は、正和三年（一三一四）ころの大破滅法をはじめとして、興国元年（一三四〇）の火災、応永（一三九三—一四二七）年間の物情騒然、文明五年（一四七三）の兵火、元和（一六一五—一六二三）の戦国争乱、天保（一八三〇—一八四三）年間の祝融、明治初年の廃仏毀釈など、たびかさなる風雨がおしよせたにもかかわらず、不滅の法灯をかがげつづけてきたのである。

開創当初の伽藍は、簡素で小規模な配置であったと思われるが、天保以降、五十年ごとに営まれる大遠忌のたびに、諸堂の新築ないし増改築が加えられ、いまや、その境内地およそ十万坪、建物は七十余棟その延坪は約四千五百坪といわれる。清澄な山谷の靈氣が、自然と技術をみごとに融和させて、独特の宗教的雰囲気をもたしている。

永平寺の主要な建物は、俗に七堂伽藍ということばによってあらわされている。永平寺の七堂伽藍は、山門（おもて門のこと。三門とも書く。寛延二年（一七四九）の改築で、最古の建物。楼上にかかっている「日本曹洞第一道場」は、後円融天皇の勅額）、仏殿（本尊仏を安置する堂のこと。シヤカが中央、その左右にカシウ、ミロクの二仏がまつられている）、法堂（住持が修行

者のために説法をするところ。各種の儀式もおこなう。僧堂（修行者が坐禅や食事あるいは睡眠を摂るところ。）、庫院（台所、お勝手のこと。）、浴室（入浴場。）、東司（便所。）であり、これらの建物が、仏の五体になぞらえた対称形の位置に配されている。禅院としての正規の伽藍配置は、わが国でも、さわめて稀れである。

このほか、道元を祀る承陽殿には、道元の像と霊塔が奉安されており、この承陽殿にのぼる石段の左手に石柵で囲ってあるのが、道元の坐禅石と伝えられるもの。また寺域の一角の寂光苑のいちばん奥に、道元の霊塔が安置してある。

道元の筆蹟、画像、遺品をはじめ道元や永平寺に関する国宝、重要文化財の指定をうけたかずかずの寺宝は、一華蔵に収められている。

承陽門（承陽殿の門。）、孤雲閣（承陽殿の奉仕者の居室。孤雲は懷辨の名にちなんだもの。）、衆寮（修行者が読書をする堂。）、按賓（師家寮、維那寮、講師寮などのあるところ。つまり、修行僧の教育にたずさわる役員の部屋。）、一華蔵（宝物庫。）、妙高台（住持の表方丈。特別の貴賓の展待所。）、不老閣（住持の居室。転じて、永平寺の住持を「不老閣」とも呼ぶ。）、大光明蔵（住持が参拝者に面接し、説法をおこなう広間。）、真陽閣（副貫首、西堂、副監院ら重役の寮室。）、叢松閣（参拝者の接待にあてられる広間。）、祠堂殿（全国の檀信徒の位牌を祀る堂。）、舍利殿（檀信徒の納骨堂。）、経蔵（天海版の一切経六千三百二十三巻が収められている。）、鐘楼。勅使門（勅使ないし住持が出入するため門。そのほか特別の来賓をおくりむかえる。）、中雀門（山門と仏殿のあいだにある門。）、吉祥閣（檀信徒の総合的な研修道場。）がある。こうした永

平寺の建物とその位置をえがいた地図に、永平寺古図と永平寺全景図とがある。前者は、享和二年（一八〇二）道元の五百五十回大遠忌のとき作成された現存最古の地図、後者は、赤堀禪福師が四年の歳月をかけて、昭和三十七年十月末に完成したもので、たてよこ約六米、十八畳敷の一枚漉きの和紙にかかっている。

いつからともなく伝えられている永平寺の七不思議を紹介しておこう。七間東司。山門の人柱。仏殿の足場。一文字廊下。僧堂の首座単。夜泣杉。中雀門の拳骨和尚の拳骨あと、あるいは僧堂の外單の血糊あと。

#### 〈補記〉

##### 越前の波著寺

さきにふれたとおり、道元は、寛元元年七月から、建長五年八月までのおよそ十年間を、越前志比庄ですごす。この間、宝治元年八月から約半歳にわたり、鎌倉に下向したほかは、一步も他へ外出せず、永平寺を主とする仏行の生活にうちこんだとおもわれる。

しかし、道元は、右の越前生活で、波著寺に出かけたことが、たしかにあったと推定される。これは異例の外出であった。それは何時のころか正確なことはわからないが、天正本『建徳記』に、

波著寺ニ置給物ハ、一、涅槃像、一、十六善神画像、一、伝灯録一部、一、鉄鉢、一、虎楸ノ拄杖、此拄杖ト十六善神トハ盗人取テ今ハナシ、永平寺住持五十代之後、彼ノ波著寺ニ開山和尚再来可レ有ト云事ヲ、波著寺ノ住僧達昔シヨリ申伝ウ、雖レ然本記録ナシ、後來能々可レ尋、此波著寺ニ御座セシ年号更ニ不見出、

（傍点東）

この文によれば、道元は、かつて波著寺を訪問し、あるいは所有の仏具、仏画、仏像、仏書などを波著寺に寄託ないし贈与した、と解される。

波著寺は、撰州吹田、京都東山、大和多武峯と各地を流浪し、最後におち

ついた達磨宗の根拠地である。

達磨宗は、大日房能忍、覺晏、懷鑒と次第するが、仁治二年(一二四一)、この第三代懷鑒(覺禪ともよぶ。建長二年とも三年の示寂ともいわれている)が、門人の義介、義演、義準、義存らをひきつれて、深草興聖寺の道元に、集団的な改衣を断行した。懷鑒もまた、いち早く達磨宗から帰投したひとで、懷鑒とは達磨宗時代の法兄弟にあたり、ともに覺晏の旧弟であった。もともと、懷鑒は、道元から菩薩戒次第を授けられたにとどまり、嗣書の閲覧は許されなかった。それゆえ、道元のもとを離れて、再び波著寺へ舞い戻らざるをえなかった。ともかく、道元の主だった弟子たちはほとんど旧達磨宗の徒であり、その門弟たちの旧巢が、おなじ越前の近距離に所在しているにあつては、なにかの機会に一度や二度は訪ねることがあつたはずであらう。いや、訪ねたのが自然であつたらう。『建搦記』の記事は信じていいとおもわれる。その意味で、この波著寺にも、道元の足跡を辿ることができるのである。そういう意味で、道元の遺跡に数えられるであらう。

ところで、いま、福井県に波著寺という寺は存在しない。かねて、私は、波著寺に関する知識を求めて、いろいろと探索の労を費いやしていた。そして、福井市立郷土歴史博物館にも照会していたが、同館から、昭和四十七年一月三十一日付で、「足羽郡波著寺について(回答)御問合せの波著寺につきまして、当方で種々調査して見ましたが、明確な史料は一切存せぬ状態です。残念ながら、口碑のたぐいも見るべきものがなく、石碑等も存在せぬ模様です」との回答を受けた。

波著寺は、もと泰澄の開基、のち真言宗にかわり、本尊に観音菩薩をまつる。はじめ足羽郡一乗谷(いまの福井県足羽郡足羽町)にあり、天正年中に、長谷川藤五郎秀一が愛宕坂(福井市)に移したという(井上翼章氏著『越前国名蹟考』)。もともと、般若寺跡は一名を波着観音といい、酒生村成願寺村に在るともする(福井県足羽郡教育会編著『福井県足羽郡誌』)が、酒生成願寺は美濃街道に近く一乗谷は、浄教寺に近く、したがって両所は、地理的にやや離れている。

なお、石川県金沢市小立野に(いまは金沢市石引十二十八―と町名変

更)古義真言宗高野山派の波着寺がある。(栗山泰音氏著『嶽山史論』)無住にひとしい魔寺であるが、この加賀の波着寺は、そのむかし前田家祖先の移封とともに、越前から附随してきたという。波着寺は、前田家はむろんのこと、義介および加賀の大乗寺、登山および能登の総持寺の成立に、きわめて因縁のふかい寺であることをつけ足しておく。

#### △波著寺旧址の確認▽

波著寺の旧址は、昭和四十四年七月二十一日、道元の祖蹟を巡拝したみぎり、大山陽堂氏によって、新しく確認された。私は、同氏から、写真を添えた説明で、現地の状況を聞くことができた。氏の御快拳と御親切に深い謝意をあらわすものである。以下、その概要を紹介して、波著寺研究の新資料を提供したいとおもう。

大山氏は、波著寺の旧址を探索して、はじめ一乗谷を訪れたが、それらしき場所を見当てることができなかった。やむをえず、同地の古老である青木某氏の指示に従って、足羽川をはさんだ対岸の側にあたる足羽川のそばの成願寺部落に進路を転じ、同部落の一番奥の家で、もと造酒業を営んでいた旧家の老婆に、波著寺のことを聞いたところ、先年没した主人から、波著寺の名前や寺趾のことを聞いているとのことであつた。そこで、この老婆の道案内で、むかしから伝えられている波著寺があつたという西谷の百米ばかりの小山へ登って、丈余の草むらをかきわけゆくと、突然、いまにも崩れ落ちんとする一基の鳥居が建っているのが目にはいった。高さ約三・五米ばかりのごくふつうの型の石造りである。この鳥居の下竹藪のなかに、縦およそ三十糎、横およそ二十糎くらいの大きさの石材に、波著寺の三字が彫りつけてあるのを、偶然に、発見することができた。この波著寺の三字を彫りつけた石標の発見によって、まさに、この地が波著寺の旧跡であることが判明したのである。おもうに、波著寺は神仏習合の寺であらう。

大山氏によれば、この石標は、その所在位置、石質などから推測するに、どうも前記の石造鳥居の類ではなかったらうか、それが地上に落下して、そのままになって、幾百年という長い年月を風雨にさらされたまま、土中にうずもれんとしているのではなかったらうかということであつた。また、この



鳥居の上には、ある程度の平坦地があり、等間隔におかれた五、六箇の建物の礎石らしいものを認めることができたという。案内の老婆の話では、このあたりに、ようどう(仁王堂の意か)、かねつきどう(鐘撞き堂の意か)という言葉も残っているとのことである。また、この波著寺の本尊観世音菩薩は、浄土真宗の名刹、ちかくの越前の吉崎御坊へ飛び去って行ったという伝説があるそうである。

波著寺旧趾は、福井市からそれほど遠くはない。福井県足羽郡足羽町の成願寺部落というところである。波著寺は、宗門の古文獻などには、波著寺とも書かれておるが、地元では、はじやくじと言っても通ぜず、なみつぎでらと、もっぱら訓んでいる。足羽川の川波の著くところに寺が在ったというのとらしい。いまの足羽川の流れは、その当時とくらべて、ずいぶん変ってしまつたようである。国鉄福井駅下車。足羽川に沿って、美濃街道をゆく。稲津橋のちかく。バスの便があり、福井駅前から、稲津まで約二十五分。稲津から徒歩およそ小一時間で現地にたどりつく。なお、稲津は、徹通義介の誕生地とも伝えられる(登山紹璣撰『尊宿出喪式』「抄割式 新円寂当寺開山和尚諱義介」ところ。最寄りの駅は、越美北線の六条。

※北海道虻田郡倶知安町字旭の大仏寺(真吉勝俊住職)は、越前の大仏寺を再興したゆかりの寺院であると聞いていたので、同寺あてに問い合わせたところ、蛇田郡京極町五三六の竜門寺住職中川玄中老師より、左のような回章(昭和四十七年八月九日付)に接した。いま必要に応じて、原文を掲げておく。

「大仏寺あての先生のご書面拝読させて頂きました、実は小生の弟子が大仏寺の現住ですが、ごく最近晋住したばかりの上、若輩にて当時の事情などわからぬのでなんとか返事をとの事で、以下、小生の先師あるいは近隣の方々よりおきき致してありました事をかき、御回答とさせて頂きます、小生もまだ開創当時は未生でしたのでくわしい事はしりませぬが、ごかんべん下さい、

大仏寺の開教は、M・32・6・15と記録にございます、

開創は齊藤忍随と云ふ方で、書、画、詩偈、漢籍に堪能の方であり秋田県人であります、越山にて安居修行中、先生もご指摘の如く、大仏寺の名蹟が消滅した事をふかくなげき、誓願をたてて渡道、大仏寺再興の決意で開教に従事、あらゆる辛苦の末、素志を貫徹し、T5年9月に寺号公称のはこびとなりました、その苦心談には当時まだ若年の小生などもふかい感銘をうけたものです、

開山には悟由禪師を拝請して、ご自分は第二世となられておられます、尚、三世齊藤慧照、四世宮川敬道、五世齊藤徹玄(S42・11遷化)、六世齊藤道寛とつぎましたが、道寛和尚が学校の教諭しかも札幌在住のため、小生の弟子に是非後任にと懇望され、去る5・30に住職辞令が出た様な次第にて、隣寺の住職であり、師僧の立場で代りにご返答をさせて頂きました、本堂の格天井の画は文化財に指定されております。」

## 十六、鎌倉留錫の地

名超なこえの白衣舎びやくしや

▲神奈川県鎌倉市大町(笹目、佐助谷、西町、北側をふくむ)

▲国鉄横須賀線鎌倉駅下車。南東へ徒歩二十分あまりのところに、名越切通しをはじめとして、名越山や、西名越、東名越の地名がある。このあたりか。

四十九歳の道元は、北条時頼の招き(『傘松道詠集』)により、宝治元年(一二四七)八月三日、永平寺を下りて鎌倉に向かい、名超の白衣舎に錫をとどめ、ここを本拠としておよそ六カ月、檀那や俗弟子のために説法をいたし、宝治二年二月十三日、永平寺へ帰った。このことは、『傘松道詠集』や、『永平広録』の「八月初三日、山ヲ出テ相州鎌倉郡ニ赴キ檀那俗弟子ノタメニ説法ス」(卷三、原漢文)、「半年飯ヲ喫ス白衣ノ

舎」(巻十、原漢文)の記録によって史実であることが明らかである。

さて、道元は鎌倉のどこに錫を留めて起居していたかというところ、あるいは時頼の別荘といい義重の邸宅ともいわれるが、これを知る直接の資料は、道元の原文を、懷辨が書写して、永平寺第六世曇希が護持していたとされる「示誡」の「宝治二年戊申二月十四日書于相州鎌倉郡名超白衣舎」の識語だけである。この識語によって、それは鎌倉郡名超白衣舎と推測するわけである。白衣舎とは、白衣は在家をあらわし、したがって在家人の家屋をいう。名超は、いまは名越と書くが、往古は、那古谷とかき、鎌倉市の南東部一帯を指す。町大路の東である(鎌倉市編『鎌倉市史』)。はじめ、北条時貞の山荘があったところで、この時貞が名越の祖といわれている。いまも、俗に名越の切通しとよんでいる地域がある。それでは、道元は、越前の永平寺を出発して、どのような径路を辿って、鎌倉に至り、名超のどのあたりにいたのかとなると、まったく研究がすすんでいない。だいいち、名超の白衣舎が、一定の宿舎であったかどうかともわからない。これらのことは、すべて今後の課題といわなければならないのである。

なお、これは真偽のほどは確かではないが、元禄二年の年記をもつ説経節の『越前国永平寺開山記』には、道元は諸国修行のおり、鎌倉に来て、一人法師は禁制として宿をかすものもないので、辻堂に泊ると、夜半に、そばの井戸から女の霊が出る。道元は戒経を授けて済度する。これを鎌倉のほし井戸という。そののち、鶴が岡に教化して宝治元年八月、鎌倉を出立して、永平寺への帰路についた。

## 十七、義介と訣別の宿

### 脇本の旅宿

#### ▲福井県南条郡南条町

▲国鉄北陸本線武生駅下車。今庄から木の本に至る一直線の立派な新道路が、旧北陸道に併行して通じているが、この新道路を今庄の方向へゆくと、およそ六杆。今庄方面ゆきのバスの便もある。最寄りの国鉄駅は王子保駅。

すでにふれたとおり、寛元二年(一二四四)夏、道元は、永平寺を開いて、その後およそ十年、建長四年(一二五二)の夏から健康を害し、翌五年の春には病状が悪化し、そのとしの七月十四日、懷辨に永平寺第二代の法席をゆずった。在京の波多野義重らのすすめもあって、京都へ療養に出かけることとなった。同年八月五日、懷辨らを従えた一行は、永平寺を出発、この脇本の旅宿で、まず一泊した。あけて八月六日、永平寺の留守役を命じた義介に対して、有名な「老婆心」の教示を垂れて、義介との最後の訣別となった(『建徳記』、『永平開山御遺言記録』)。義介は、その編録する「永平開山御遺言記録」で、「義介於脇本御旅宿賜暇之因」とかきはじめ、「是則最後拝顔、最後嚴命、尋常銘肝不忘也」とむすんでいる。

この脇本の旅宿の遺跡を顕彰するきっかけは、昭和三十八年秋、京都、越前地方の道元旧跡を巡拝した、愛知県第一宗務所管下の有志寺院を会員とする「愛知吉祥会」の発願であるという。すなわち伊藤浄天老師(瀬戸市慶昌院)、木村正範老師(名古屋市陽秀院)らの熱意が、地元の武生市盛景寺の佐々木泰翁老師を動かし、顕彰運動が具体化するかにみ

えたが、佐々木氏の遷化は、計画を中断させた（苗岡自照氏稿『顕彰された越前脇本の祖蹟』（下）・『曹洞宗報』昭和四十二年八月号）。

爾来、地元の有志寺院のあいだで、祖跡を顕彰するための具体的計画が審議され、昭和四十一年九月二十五日、「道元禪師脇本旅宿御遺蹟顕彰会」（事務所・武生市新保町 宗生寺内）が、発会式をあげ、顕彰碑の建立と、『道元禪師脇本御遺蹟顕彰概要』（十四頁）の刊行とが計画され、無事に完成した。

顕彰碑の建立された場所は、北陸街道ぞいの明治天皇御小休所の史蹟を伝える左隣である。ここは、この地の旧家中山兆平氏が無償で提供した。

その境域は間口三間余、奥行十間、三十坪（約百平方米）の面積で、高めに土盛をして、左右と背後は高さ一米ほどのブロック塀、前方は中央に石段をくみ、石の玉垣でかこんである。長方形の境域の奥に、五尺四方、高さ四尺五寸の御影石の基壇のうえに自然石の台座、そのうえに自然石の顕彰碑がおかれ、あわせてほぼ二米くらいの高さをもつ。顕彰碑の正面には、「道元禪師」の大字が、その左に「御旧蹟」の三字が小さく、右の方には「永平泰禪敬書」の六字が、これまた小さく刻まれている。碑の前の右側に、高さ三尺、幅二尺の仙台石の脇石が、自然石の台座のうえにたち、会長大久保道舟氏の起草を、永平寺貫首熊沢泰禪禪師が朱点を加えたという「御旧蹟由来」が刻んである。次のとおり。

#### 御旧蹟由来（表面）

此ノ地ハ道元禪師が建長五年八月五日永平寺の檀那波多野義重公ノ懇請ニヨリ京都へ上ラレタル途次ニ宿泊セラレタ処デ弟子義介和尚ニ永平寺ノ監理ヲ依嘱シ訣別ヲ行ハレタ御旧蹟デアラル  
永平室中間書ニハ其時ノ法話ノ数々が収載セラレ師資懇情ノ濃カナリシ様子ガ拝知セラレル

乃チ禪師ニハ翌日本ノ芽峠ヲ越エ若狭路ヲ通ツテ京都へ向ハレ高辻西洞院ノ俗弟子覚念ノ邸ニ於テ静養ニツトメラレタ

福井県寺院ハ夙ニ此ノ御遺蹟ノ顕彰ニ思ヲイタシ昨秋ソノ計画ヲ全国寺院ニ告ゲタトコロ永平寺不老閣猊下ヲ初メ多数ノ御賛助ヲ得殊ニ欧米人ノ寄進ヲ願ウモノサエ現ハレテ事業ハ順調ニ進ミ遂ニ完成ヲミルニ至ツタ

尚当処ハ中山家ノ邸地ノ一部デアアルガ此ノ顕彰ノ趣旨ニ随喜シ進ンデ提供セラレタモノデアアル

是等ハ皆禪師ノ廣大ナル御遺徳ニ起因スルモノデ幹縁者一同ソノ恩沢ニ感激シ玆ニ聊カ顕彰ノ顛末ヲ記シテ後世ニ伝エントスル

敬 白

昭和四十二年四月吉祥日

#### （裏面）

發起人

武生 盛景寺 故佐々木泰翁

御遺蹟顕彰会長

武生 竜門寺 大久保道舟

副会長

敦賀 永建寺 久我禪戒

幹事

武生 宗生寺 石塚良光

会計

宅良 慈眼寺 小原巖雄

外 福井県曹洞宗有志寺院一同

脇本は、古くは湧本とも書いた。この地に白清水とよぶ清泉が湧出したことに由来するという。江戸時代は宿場として、ひとの往来が盛んであったが、いまは百戸たらずの農村である。ちかくに、明治天皇御小休所があり、また越前富士の名をもって呼ばれる日野山がそびえている。

## 十八、越前最後の地

木の芽峠  
きめとうげ

▲福井県南条郡今庄町

▲国鉄北陸本線今庄駅下車。上新道という部落から、二ツ屋という部落にはいる。「明治天皇行在所」としてされた石の標柱がある。それから、かなりの坂道をのぼり、万戸岩とよばれる巨岩、言奈地蔵堂をすぎて、およそ徒歩二時間半あまり、標高六百二十八米の木の芽峠にたどりつく。全長約十四軒におよぶ、日本一の北陸トンネルのあたかも真上が、だいたいこの地点にあたっている。今庄駅の近くの山中に、「曹洞宗開祖道元禪師木ノ芽峠御霊蹟参拝駅 是ヨリ凡ソ二里」とした標柱が建てられているから、はじめてのひとにも、おおよその見当がつく。

この峠は、建長五年八月六日、道元とその一行が、若狭から丹波路を経て京都へ向った（天正本『建擧記』）おりの、越前最後の地点である。

もっとも、栗山泰首氏は、丹波路から上洛したという『建擧記』の記事や、これを支持する面山の『訂補建擧記』補註などにはじまる通説に反対して、その大著『総持寺史』において、「重き御病床を越前から若狭へ入り北山城の外を迂廻して丹波路からの御入洛は何としても考へ得られぬ路順である」、「木の芽峠より下り、木の芽川に沿ふて谷口にいたり道口から疋田に出で、愛発関址のほとりから追分、山中を過ぎて西江州に入り、洛北を経て御入洛あったかと思ふ、何故ならば往古に於ける越前の愛発関は美濃の不破、伊勢の鈴鹿と相對して東海、東山北陸三道に於ける三大関の一であって、京洛より北国路に入るものはみなこの順路に依ったものである」と唱えている。さて、『建擧記』・『傘松道詠』によれば、道元は、この木の目山で、次の和歌を詠んだと伝えられる。

草ノ葉ニカトテセル身ノ木部山

雲ニヲカアル心地コソスレ（天正本『建擧記』）

この峠は、越前と若狭の国境にあたり、古くから、この地では、今庄、木の芽峠、敦賀、若狭路をへて、さらに丹波路をまわり、京都へ上ったという。したがって、木の芽峠は、かなりの難所ではあるが、避けることのできない街道の峠であった。

この地には、天保と昭和の二回にわたって顕彰碑が建設された。

天保十三年（一八四二）、大本山永平寺第五十七世戴庵禹隣が、越前、若狭の有志寺院、すなわち孝顕寺、永建寺、永巖寺、空印寺、臥竜

院、棟岳寺らの協力とともに、自然石の碑をたてた。中央に、「道元大禪師」と刻み、その左右に、二行に分けて「草の葉に首途せる身の木の目山」「雲に路ある心地こそすれ」の詠歌がほりつけてある。かなり風化して読みにくい。

昭和十五年（一九四〇）、境域を拡張して整備を加え、自然石碑の基壇をあためて高くして、その両翼に、懷辨（向って左）、義介（向って右）の碑を新添し、境域の左右と前後に、石の玉垣をめぐらし、大石灯籠を一對そなえた。同年九月二十九日、福井県下およそ二百五十の有志寺院が随喜のもとに、永平寺第六十八世泰慧昭禪師が、導師となって、改修の落成式を挙行了た。

なお、左隅の碑誌の一節に「此ノ地ハ曹洞宗開祖道元禪師及ビ三祖徹通師資訣別ノ靈蹟ナリとするされてあるが、これは面山の『訂補建搆記図絵』にもとずくところがあるのである。この木の芽峠は、師資訣別の靈蹟というよりも、『草の葉に……』云々と詠じた感懷の詠歌に結びついた靈蹟と考えるべきであろう」（伊藤俊彦氏稿『研究旅行記』『宗学研究』第三号）という意見がある。また、文献史料のうえからみるかぎり、木の芽峠は、詠歌の場処というにとどまるが、三十五歳の若い義介にとつて、脇本の宿から木の芽峠まではあえて遠距離というほどではなく、越前、若狭の国境まで見送るのが、地勢的にも心情的にもごく自然な訣別というべきではなかったろうかという意味の見解（笹岡自照氏・前掲書）もある。

なお、永平寺では、修行僧の年中行事のひとつとして、木の芽峠の祖

蹟巡拝をつづけている。その第一回は、昭和十二年（一九三七）の四月ごろ、ときの副寺<sup>ふうし</sup>佐々木泰翁老師の引卒であったという。

#### 十九、入滅地

##### 覚念<sup>かくねん</sup>の私宅<sup>しかたく</sup>

▲京都府京都市下京区高辻通西洞院西入ル北側（高辻西洞院郵便局入口）  
▲市バス北野ゆき、西洞院松原下車。

「高辻西洞院」（天正本『建搆記』）に、覚念の私宅があり、療養すること二旬あまり、建長五年（一二五三）八月二十八日（太陰曆）寅の時、道元は入滅した。かぞえて五十四歳、満年令の五十三歳九箇月ばかりとなる。波多野義重は右手に腫物ができて死去したが、道元も「腫物ニテ御涅槃アリ」（天正本『建搆記』）とある。

このとき、道元は、病床から起きあがって、室内を<sup>きんぴん</sup>経行し、低声に『法華経』「如来神力品」の一句を誦し、これを面前の柱にかきつけ、また「妙法蓮華経庵」と書きとどめ、最後に遺偈をしるして筆をなげうった。

覚念とは、かの波多野義重に協力して、傘松峯大仏寺伽藍の建立に尽した、左金吾禪門覚念のことであろうとされている。このひとは、越前の今立郡の南東郡あたりの有力者であって、『続七国志』の三巻にみえる真柄備中守や真柄左馬助らの先祖にあたるらしい（『訂補建搆記』）。

覚念の邸は、現在の高辻西の洞院を西へ入ること約百米北側の一廓に該当するとして、高辻西洞院郵便局入口に、昭和十三年（一九三八）十

二月、京都府史蹟会による「道元禪師遺蹟之地」という石柱が建てられている。この石柱は、誕生寺の住職であり、当時の永平寺副監院であった小泉鉄心老師の尽力が大きいという。「道元禪師遺蹟之地」というその遺跡とは、なにをあらわす遺跡なのか、いささか曖昧であるが、死を意味する入滅とか終焉とかの文字を使用することを嫌悪した土地のひとつの感情を尊重した結果であるという（笹岡自照氏・前掲書）。

しかし、はたして、この地が、覚念の邸趾であるかどうか、京都府史蹟会をはじめとする郷土史家らによって推定されたいきさつ、また、その根拠や証明については、ほとんど定かではないようである。最近はこの附近が、道路改修の計画区にはいっていると風聞する。そうなる、この標柱も、やがて移ることになるであろう。

△補記▽天正本『建擧記』によると、その後、覚念は、道元が「妙法蓮華經庵」とかきつけた柱をぬきとり、「越前ノ今南東ノ郡月尾山下ニ始テ塔婆ヲ建立シ、此柱ヲ即チ中心柱トシテ日々奉ニ供養」という。この場所を、面山は「今ノ別院是也」（『訂補建擧記』）と説明している。大久保道舟博士は、別院とは、月尾谷の別邸という部落を指したものと考えられるとのべた（『道元禪師伝の研究』）。別印は、いま福井県今立郡今立町に属している。しかし、別印には、それに該当する遺跡はみあたらないが、晩年の懷辨が、今立郡味真郷地方に住庵（美味峯また如意庵のことを指すか）したと、あるいは、別印の近くの太平部落に、江戸中期、今立郡今立町竜淵寺第二世蟠竜の開いた月心庵とよぶ宗門寺院の遺址があること、これらのことは、覚念が月尾山下に建柱したこと、なにか深い関係があるように思われると、大久保道舟氏はのべている（前掲書）。参考までに紹介しておく。

## 二十、茶毘塔

▲京都府京都市東山区円山公園鷲尾町  
▲円山公園内の西行庵ないし芭蕉堂の裏に、道元の茶毘塔がある。「道元禪師茶毘所」とかいた小さな案内立札がめじるし。円山公園は、市電祇園、市バス祇園石段下で下車、東へあるいて三分ばかりのところ。

天正本『建擧記』によれば、道元の遺骸は、「洛陽ノ天神中小路ノ草庵エ」安じ、そののち、波多野義重の斡旋によって、「東山ノ赤辻ニ小寺ノアリシニ尊龜ヲ奉リ移テ依レ法火葬シ奉ル」としてのされている。ところが、京都市東山の高台寺文書の一節によれば、次のとおりである。

御入滅ノチ雲州太守ノハカラヒニヨリヒガシ山建仁寺ノ西門ヨリイリシバシ故僧正ノ塔前ニ龜ヲトメ懷辨和尚舍利礼文ヲ奉シワカレシミタマフソレヨリコノ寺ノ三昧処東山雲居寺ノキタ南ハ鷲ノ山ニトナリセル白山嶺ノモト谷川ノホトリ祇園林トイフナル松並木ノツラナル赤築地花園ノスミナル地ニ龜ヲウツシタマツリ如法ニ茶毘シタマツル懷辨和尚舍利礼文ヲ奉セラレ僧俗コレニ和シテ宝龜ヲメグルコエモタヘタヘナリ建仁寺ノ僧ドモカワルカワル来リテワカレヲシミタマツルヒトトキアマリニテ茶毘一ヘンノケムリト化シタマフアハレナリケル次第ナリツラナリニシ僧俗ノトモガラ別ニ詳シク記サイナリ経豪和尚筆ヲトラルト云云

永興菴永平開山ノ茶毘所ナリ詮慧和尚開之経豪和尚住持云云ノチ建仁寺西来院権管

永正二年九月□□□□

依□□□一校——

伝領 康徳寺司篋

この高台寺文書によれば、道元の遺骸は、はじめ「建仁寺」榮西の「塔前」に安じ、さらに、この建仁寺の「三昧処」たる「東山」「赤築地花園」に移し、ここで茶毘に付したという。

いずれにしても、道元の遺骸を茶毘に付した場所は、「東山ノ赤辻」、「東山」の「赤築地」であるとするのが、いま両書の記述である。『山城名勝志』（第十五愛宕郡五）に、「赤築地」は「赤辻」とも呼称し、きようかくどう經書堂の西一町ばかり、五条の南、橋を出た路の北あたりを指すという。要するに、故今津洪嶽氏の談話によれば、赤築地とは、祇園から五条あたりの東山一帯をいうらしい（笛岡自照氏・前掲書）。九月六日、懷辨は、道元の遺骨を奉持して、京都を出発し、十日酉の刻、永平寺へ帰山し、十二日申の刻、方丈で入涅槃の儀式のように供養を勤行した。そして、西隅に塔を建てて「承陽庵」と名づけたという（天文本『建徳記』）。懷辨は、道元の遺骨を胸に、一日千里を飛びいきおいで、なつかしい永平寺へ直行したと想像されるが、その経路はどのようであったかわからない。おそらく最短距離をえらんだことであろう。

さて、道元の茶毘塔とよばれる墓は、高さ一米にみたない鎌倉様式の五輪塔である。昭和のはじめころ、すでに、高台寺の竹林のなかに「道元禪師の灰塚」といわれる塔の存在がとり沙汰されていたようである

（村上素道氏著『永平二祖孤雲懷辨禪師』が、その塔は、おそらくこの五輪塔のことであろう。けれども、この五輪塔が、道元の茶毘塔であると断定する直接の根拠はつまびらかではない。ただ、さきに紹介した高台寺文書と、現存する五輪塔の地点とをむすびあわせて、これを道元の茶毘塔と推定するのは、必ずしも無理なことではないであろう。その限りに  
おいて、茶毘塔のあるところ茶毘地ということになる。もっとも、私は、昭和四十八年八月十六日、第四回の茶毘塔参拝を行なったが、このとき、あらためて検討すると、道元の茶毘塔の真後に高さ四十糎くらい幅十五糎くらい、また左横に高さ五十糎くらい幅十七糎くらいの五輪塔が二基安置してあった。この二基の五輪塔は中心の道元の茶毘塔の五輪塔といたったいかなる関係があるのか、いささか気にかかるのである。

道元の法嗣・詮せん慧は、この地に「永興菴」を開創して、「正法眼蔵聴書」を完成したが、ほどなく廃絶したという。ちなみに、高台寺文書は、康徳寺の司篋が、永正二年（一五〇五）に伝領したと知られる。康徳寺は、慶長のはじめ、北政所が実母の朝日局のために建てた寺であり、高台寺は、徳川家康が北政所のために建てた寺である。高台寺の寺名は、北政所の高台院湖月という法号に因んで名づけられ、司篋はその開山となった。はじめ高台寺は曹洞宗であったが、いまは臨済宗である。道元の茶毘に関する記録としては、もっとも詳しく、もっとも成立年代の古い史料であろう。ながながと引用したのは、その故である。

それはさておき、昭和二十六年（一九五一）十月、京都府下曹洞宗有志寺院主催、道元七百回大遠忌の予修法要が、ときの管長高階瓊仙禪師

によって、五条高倉の宗仙寺で営まれたが、このとき参加寺院の宗侶五十名ばかりが、この茶毘塔前で供養法会をおこなった。これよりさき、妙説菴主久我寛宗老尼は、毎月二十九日、尼衆を引卒して参拝、茶毘塔の供養をつとめた。

昭和二十七年春、茶毘塔の保護と顕彰とを目的とした正法会が組織された。会長は宗仙寺住職細川容伯老師であった。同年十二月二十六日申請認可、同二十九年四月末に工事完了。同九月二十九日、高階管長を導師として、その落成法要がおこなわれた。

すなわち、菊溪川<sup>きくたがわ</sup>沿いに幅およそ二米、長さおよそ四十米の参道を設けた。境内は、長方形で五十坪余、中央に幅九尺、奥行十二尺、高さ一米ほどの石垣積みの基壇と、その中央に一米立方ほどの御影石の台座をすえつけ、その上に茶毘塔を安置し、塔前に御影石の供物台と花立とをとりつけ、境内の三方に生垣用の樹木を植えた。費用の概算は約二百万円。この場所は、京都市有地であるため、借地料そのほかの諸雑費は、正法会長細川容伯氏がかなりのあいだにわたって個人で負担した。

更に、塔の正面に石材の献香台が「京都尼僧団」によって「昭和三十一年一月廿六日」に寄進された。表面に「献香」の二字が彫りこんである。

また、正面向って右手に高さおよそ一米五十糎、幅およそ三十糎の石柱が建てられた。表面は、「曹洞宗高祖道元禪師茶毘御遺跡之塔」とあり、その左側に「永平七十一世遠孫比丘瓊仙敬書」と署名がしてある。

裏面は、「曹洞宗高祖道元禪師は内大臣久我通親の子十三歳の春叡山に上り出家得度後天台の教学を修め更に内外の智識に道を訪ね遂に大宋国

に渡って天童山の如浄禪師より釈迦牟尼仏正伝の仏法を相続して帰国せらる、後興聖寺、永平寺を開山日本曹洞の初祖也、建長四年秋病を發し翌年京に帰り西洞院高辻の俗弟子覚念の邸に病を療ぜらるるも八月廿八日御歳五十四歳で遂に遷化せらる、直ちに龕を天神裏の小庵に移し遺弟等東山赤築地の当処に於いて茶毘に付す、爰に京都府下の法孫報恩の微意を表し謹しんで建立 維持 昭和四十年八月廿九日 京都府曹洞宗務所長 鷹峰竜乗」という文章が七行にしたためてある。

また、正面の左右に、高さおよそ一米、幅およそ二五糎の石灯炉一對がそなえられた。向って右の裏に「京都第一教区寺族会」向って左の裏に「昭和四十二年九月二十九日建之」としてある。

この茶毘塔を拝するひとは少なくないとも見え、供養の塔婆も数多く建てられ、香華も絶えることがないようである。

#### △補記▽

##### 洞谷伝燈院五老峰と大乘寺

洞谷伝燈院五老峰は、洞谷山<sup>どうくさん</sup>永光寺<sup>えいこうじ</sup>（いまの石川県羽咋市酒井町）の開山堂である。ふつう「五老峯<sup>ごろうほう</sup>」とよんでいるが、永光寺では「天童山<sup>てんどうざん</sup>」とも言い慣わしている。この五老峯は、永光寺の開山・瑩山紹瑾が、元亨三年（一三二三）九月、五十六歳、示寂の三年まえ、建立した。ふつう、開山堂は、その寺院を開創した僧の位牌を中心に、その左右に歴代の住職の位牌を奉安するのである。然し、瑩山は、この通規に従わなかった。即ち、瑩山は、正面中央の檀上に、天童如浄の位牌を配し、むかつて右側には、永平道元、徹通義介、むかつて左側には、孤雲懷辨、瑩山紹瑾という順序で、それぞれ設定して、これを五老の遺蹟とし、正伝の門風を興行する一大拠点としたので



あった。このしるしとして、如浄の語録、道元の靈骨、懷井の血經、義介および瑩山の達磨宗嗣書、五部大乘經などを収蔵した。収蔵するために、法堂のうしろの開山堂の裏山に、高さおよそ五、六米、直徑二十米ばかりの土盛りを築造し、これにあてたのであった。

瑩山の『洞谷伝燈院五老悟則并行業略記』（『洞谷記』）の「曾祖 越前吉祥山永平寺開山和尚」道元の項には、その末尾に、「今得靈骨小片、安当山西之隅」としてある。これによると、この永光寺に、道元の遺骨が埋葬してあることがわかる。その意味で、永光寺は、永平寺承陽殿、興聖寺開山塔とならんで、道元の遺骨をまつる祖廟であるといわなければならない。

さてまた、瑩山は、この二週間ばかりののち、即ち元亨三年十月九日、『山僧遺跡寺置文記』（『洞谷記』）を撰し、加州の大乘寺について、大乘寺は、加賀の国で第一に貴とい寺であるとのべ、また「永平一二三代之靈骨安置所也」と明記しているのである。永平一二三代とは、言うまでもなく、永平寺第一世道元、第二世懷井、第三世義介（大乘寺の第一世で、瑩山の本師）を指す。いま、大乘寺は、道元、懷井、義介の三人の「靈骨」を「安置」したところだといふのである。瑩山は、乾元元年（一三〇二）三十五歳、大乘寺二代住持職に補任され、文保元年（一三一七）十月二日、五十歳のとき、永光寺に入院するまで、大乘寺を中心に修行生活をおくったが、この間、延慶二年（一三〇九）九月十四日、九十一歳で義介が示寂したあと、いくばくもなく、道元をはじめとする三人の遺骨を安置したのであろう。してみると、この大乘寺も、洞谷伝燈院五老峯とはべつの意味で、やはり道元の墓所ということになろう。

ただし、大乘寺は、いまは石川県金沢市長坂町（野田山墓地の傍）に在るが、もとは加賀押野莊野市外守、即ち、いまの石川県石川郡野々市町に在ったのである。のち、大乘寺の寺地は二転、三転し、もとの土地は耕作されて田畠と化した。

ところで、大正四年（一九一五）、野々市町の大乗寺開山塔の旧址から、石櫃三個が発掘された。郷土史家の館残翁氏は、これを、いわゆる永平三祖の靈骨と判断し、なお館家に、なかの小瓶に骨粉の存する一石櫃を保存してい

るという。

大正十年（一九二一）、大乘寺第六十五世清水大竜老師をはじめとする十二人の僧は、さきに発掘した三祖の靈骨を、野々市の木村次作氏邸で供養し、以後、毎年この行事を続行してきた。

また、昭和二年（一九二七）、金沢市・栄昌庵の直指石応老尼は、野々市の大乗寺遺址に、自費を投じて、一庵を創建し、かつて廃絶した大乘寺の塔頭・高安軒を再興し、三祖の靈骨を奉安し、もってその旧域を顕彰した。高安軒落慶式に臨み、大竜老師は、靈骨の発掘者野村松次郎氏、保存者館八平氏（残翁）、建立者直指石応尼、協力者佐々木玄光老師、木村治作氏ら諸氏の功績を表彰した（館残翁氏著『加賀大乘寺史』）。